

テーション会場にパンフレットを置き、希望者が取れるようにした。

○体育研究所ウェブサイトのリニューアル

併せて、体育研究所のウェブサイトを大幅にリニューアルした。ウェブサイトの中で、体育科目に興味を持ってもらうために以下の点を心がけた。

1. レイアウトを大幅に変更した。これにより、日吉設置科目だけでなく三田設置科目もあること、実技だけでなく講義・演習もあること、ウィークリースポーツだけでなくシーズンスポーツもあることなどをわかりやすく示した。
2. 体育研究所のウェブサイトから、各体育科目のシラバス・履修方法・時間割・実技場所地図を閲覧することができるようにした。
3. 授業に関する写真や動画を作成し、掲載した。



※2015年6月時点でのトップページ

2013年4月から2014年3月までの月間ユーザー数とページビュー数を図2に示す。リニューアル直後の月間ページビュー数が22,983、1年後の2014年4月には月間ページビュー数が42,978となり、ウェブサイトの認知度が上がっていることが伺える。

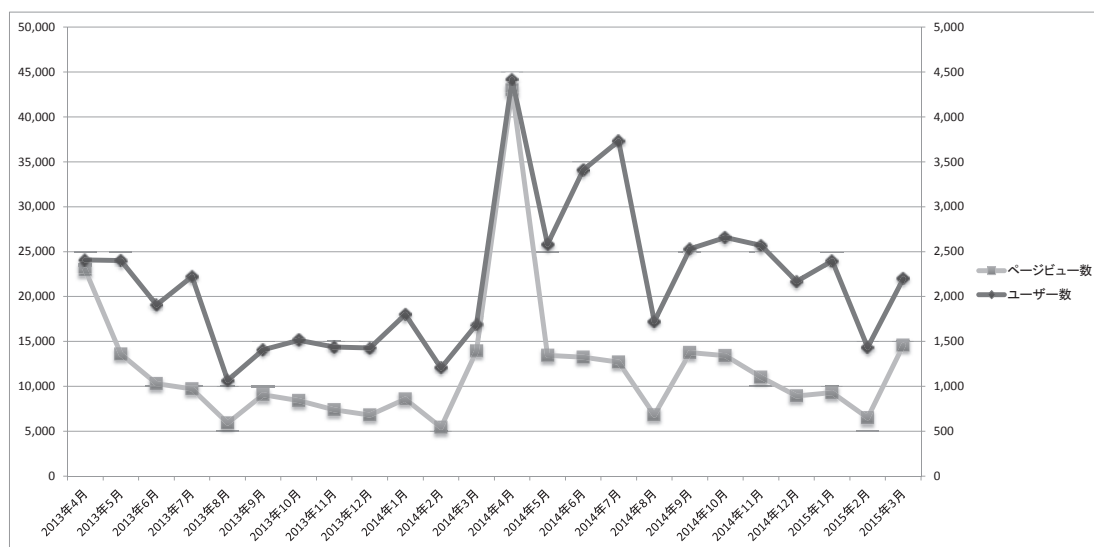


図2. 体育研究所ウェブサイトの月間ユーザー数及びページビュー数

○体育科目アピールの取り組みの結果

上記の取り組みの結果、2013年度の体育科目履修者の総数が7,043名、2014年が7,367名と2年続けて増加した。

過去5年間の日吉設置科目における学部学生履修者の学年内訳を図3に示す。2012年度に比べて2013年度及び2014年度の1年生の履修者が増加していること、日吉設置科目を履修する3、4年生も増加していることから、体育科目パンフレットによってアピールの対象とした新生及び3、4年生に対する訴求力を高めることができたと考えられる。

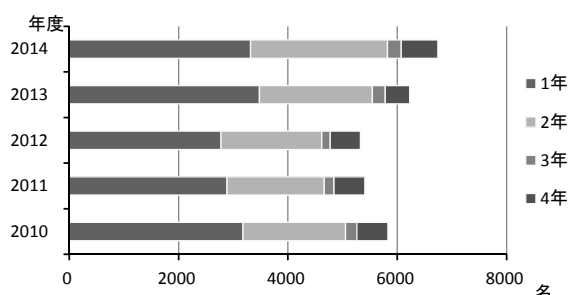


図3. 日吉設置科目における学部学生履修者の学年内訳

三田設置科目における学部学生履修者の学年内訳を図4に示す。三田設置科目においても2012年度と比べて2013年度及び2014年度の履修者が増加し、特に2014年度においては4年生の履修者が40名以上増加した。これは、4年間にわたってスポーツや運動の機会を提供するという意味でよい傾向であると考えられる。

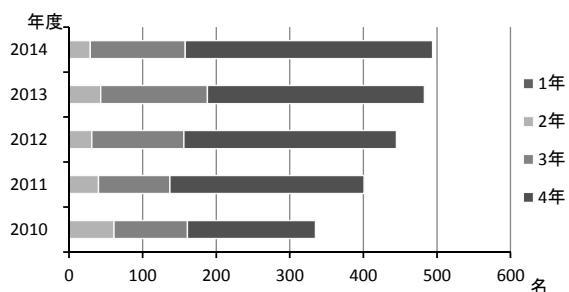


図4. 三田設置科目における学部学生履修者の学年内訳

シーズンスポーツにおける学部学生履修者の学年内訳を図5に示す。2010年度から2011年度にかけての履修者の減少は震災の影響が

あると思われる。しかし、2013年度、2014年度は履修者が増加し、定員に対する充足率は88%であった。シーズンスポーツに関してはウェブサイトにて授業風景の動画を掲載したり、体育科目パンフレットにも取り上げたりするなどの効果が現れたものと考えられる。

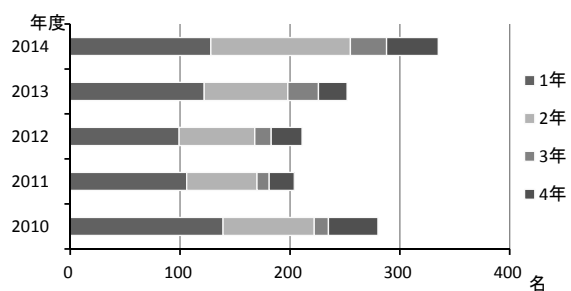


図5. シーズンスポーツにおける学部学生履修者の学年内訳

○まとめ

2013年度から取り組んだ体育科目のアピールにより、体育科目の履修者は増加した。これは、今まで学生からの声にあった「三田で体育が取れるとは思わなかった」「シーズンスポーツがあることを知らなかった」等に応えるものとして一定の効果があったと考えられる。このような広報をこれからも積極的に行っていくことが、体育科目のみならず、体育研究所の使命を果たしていくためには必要なことである。そのためには、授業の様子を随時ウェブサイトやフェイスブック等のSNSで発信していくことも行っていくべきであろう。

その一方で課題もある。このようなアピールは本来運動やスポーツをする機会があり、身体を動かすことが好きな学生に対しては効果があるように思われる。しかし、我々の教育が必要となるのはむしろ運動やスポーツをする機会がなく、身体を動かすことが苦手な学生にどうメッセージを伝えるかが重要であるという考え方もできる。

今後は後者の学生に対する訴求力を高める方策も検討しながら、慶應義塾の体育教育を担うという使命を引き続き果たしていきたい。

Ⅱ. 研究活動記録

(研究委員会)

1. 個人研究業績・教育業績・研究助成

石手 靖 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(報告書)

- ・石手靖, “活力ある塾生の育成”, 2014年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書, 慶應義塾大学体育研究所: 28, 44-47, 2015.

学会発表等

- ・村山光義, 石手靖, 植田史生, 須田芳正, 福士徳文, “スポーツ科学分野の LLLT 研究トピック2014”, 第18回日本レーザー・スポーツ医科学学会・Annual Report (慶應義塾大学・横浜), 2014.12
- ・Hideki Fujimoto, Norihumi Fukushi, Yasushi Ishide, Takashi Toriumi, “Study of the Assessment of Body Composition in Japanese College Athletes”, International Journal of Arts and Sciences, Valletta, Malta, 2015.3.
- ・Takashi Toriumi, Toshiaki Sakai, Koji Kato, Yoshimasa Suda, Yasushi Ishide, “Talent Identification for College Athletes by Using their Body Composition” The IAFOR International Conference on Education, Dubai, 2015.3.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・石手靖, “活力ある塾生の育成”, 慶應義塾大学体育研究所・(公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム「大学生をどう育てるか 教養体育からの発信」, 慶應義塾大学, 2014.11.

(役職)

- ・日本バレーボール学会理事・渉外委員長
- ・日本レーザー・スポーツ医科学学会理事
- ・大学ライフスポーツ教育学会理事
- ・横浜ビーチバレーボール連盟理事

研究助成等

- ・“「活力ある塾生」を生み出すための総合的プロジェクト”, 調整予算(日吉)プロジェクト事業, 235.5万円
- ・“「ブラインドサッカー論-アダプテッドスポーツの未来デザイン」における身体知・障がい理解教育プログラムの開発・改善と KEIO フットサルアドベンチャー2014の開催”, 調整予算(日吉)プロジェクト事業, 48万円.

植田 史生 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

学会発表等

- ・村山光義, 石手靖, 植田史生, 須田芳正, 福士徳文, “スポーツ科学分野の LLLT 研究トピック2014”, 第18回日本レーザー・スポーツ医科学学会・研究レポート(慶應義塾大学・横浜), 2014.12

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・ハーヴァード大学剣道夏季合宿講師, 長崎, 2014年8月
- ・南ドイツ剣道夏季稽古会講師, ドイツ, 2014年9月
- ・ハーヴァード大学剣道秋季合宿講師, ハーヴァード, 2014年11月

(役職)

- ・日本レーザー・スポーツ医科学学会理事

- ・ハーヴァード大学剣道部ヘッドコーチ、ライフタイムデレクター

研究助成等

- ・“剣道の国際交流およびハーバード大教育制度の体験プログラム”，未来先導基金公募プログラム，266.6万円

当年中の研究教育活動の概要

日本医用レーザー研究所と共同で、低反応レーザー照射による筋機能に関する研究を行いながら簡易低反応レーザーの実用化に向けて開発中である。

近藤 明彦 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・永田直也，山内賢，佐々木玲子，加藤大仁，近藤明彦，“「大学教養体育における運動・スポーツに対する動機づけと授業における動機づけ雰囲気の関係」”，慶應義塾大学体育研究所紀要，第54巻第1号，p17-24 (2015).

学会発表等

- ・永田直也，山内賢，佐々木玲子，加藤大仁，近藤明彦，“大学における教養体育の授業が学生の運動に対する動機づけに与える影響”，日本体育学会，岩手，8月25日(月)～28日(木)
- ・NAGATA Naoya, YAMAUCHI Ken, SASAKI Reiko, KATO Hirohito, and KONDO Akihiko, “A study of the validity of the motivational climate questionnaire for college physical education.”, 7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress. Asian-South Pacific Association of Sport Psychology, 国立オリンピック記念青少年総合センター (東京都渋谷区代々木), 2014年8月8日
- ・NAGATA Naoya, YAMAUCHI Ken, SASAKI Reiko, KATO Hirohito, and KONDO Akihiko, “Relationship between the motivational climate and motivation of participation for exercise in college physical education classes.”, The 9th Japan German Sport Science Symposium, The 9th Japan German Sport Science Symposium Organizing Committee, 慶應義塾大学 (神奈川県横浜市), 2014年9月18日

佐々木玲子 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(著書)

- ・佐々木玲子 (分担執筆), “幼児期運動指針 実践ガイド”, 日本発育発達学会編, 杏林書院, 2014.
- ・佐々木玲子 (分担執筆), “子どもの遊び・運動・スポーツ”, 浅見俊雄, 福永哲夫編著, 市村書店, 2015
- ・佐々木玲子 (分担執筆), “アクティブ・チャイルド・プログラム 子どもの心と体を育む楽しいあそび”, 佐藤善人, 青野博編著, ベースボール・マガジン社, 2015

(論文)

- ・田中千晶, 引原 有輝, 安藤 貴史, 大河原 一憲, 薄井 済誉子, 佐々木 玲子, 田中 茂穂, “関東圏在住幼児の体力・運動能力と就学前の保育・教育施設内および施設外における運動・スポーツの実施状況や日常の身体活動量に関する横断的研究”, 体力科学, 63巻, 3号, 323-331, 2014
- ・永田直也, 山内賢, 佐々木玲子, 加藤大仁, 近藤明彦, “大学教養体育における運動・スポーツに対する動機づけと授業における動機づけ雰囲気の関係”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 第54巻: 17-24, 2015

学会発表等

- ・Sasaki R, Ishizawa J, “Observational assessment of fundamental movement skill proficiency in preschool children”, 19th annual Congress of the European College of Sport Science, Amsterdam, 2014年7月
- ・Ishizawa J, Sasaki R, Yoshitake Y, “Relationship between daily physical activity and movement ability in preschoolers”, 19th annual Congress of the European College of Sport Science, Amsterdam, 2014年7月

- Nagata N, Yamauchi K, Sasaki R, Katoh H, Kondo A, “A study of validity of the motivational climate questionnaire for college physical education”, 7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress”, Tokyo, 2014年8月
- Nagata N, Yamauchi K, Sasaki R, Katoh H, Kondo A, “Relationship between the motivational climate and motivation of participation for exercise in college physical education classes.”, The 9th German-Japan Sport Science Symposium, Kanagawa, 2014年9月
- 佐々木玲子, 石沢順子, “幼児の運動能力水準の差異からみた自由遊び中の出現動作”, 第65回日本体育学会, 岩手県盛岡市, 2014年8月
- 永田直也, 山内賢, 佐々木玲子, 加藤大仁, 近藤明彦, “大学における教養体育の授業が学生の運動に対する動機づけに与える影響”, 第65回日本体育学会, 岩手県盛岡市, 2014年8月
- 石沢順子, 佐々木玲子, 吉武裕, “強度および活動様式からみた幼児の日常身体活動量”, 第69回日本体力医学会, 長崎県, 2014年9月

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- 佐々木玲子, “動作・パフォーマンスの性差”, 生命の教養学, 慶應義塾大学日吉キャンパス, 6月
- 佐々木玲子, “幼児期における運動遊びの重要性～健やかな体と心を育むために”, 平成26年度神奈川県公・私立幼稚園合同経験者研修講座, 県立総合教育センター善行庁舎, 1月

(講師)

- 佐々木玲子, “青少年期の成長発達と運動”, 健康運動指導士養成講習会, 東京, 5月, 8月, 1月
- 佐々木玲子, “ジュニア期のスポーツの考え方”, 日本体育協会ジュニアスポーツ指導員養成講習会, 横浜市, 10月
- 佐々木玲子, “動きの発達とスキルの獲得”, すぎなみスポーツアカデミー指導員養成講習会, 杉並区, 1月

(役職)

- 日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会委員
- 横浜市スポーツ推進審議会委員
- 東京体育学会常任理事
- 比較舞踊学会副会長
- 日本子ども学会理事
- 日本体育協会「アクティブチャイルドプログラム普及啓発事業」有識者会議委員
- 笹川スポーツ研究助成選考委員会委員
- 「子どもと発育発達」編集委員
- 「International Journal of Sport and Health Science」(日本体育学会)編集委員
- 日本体育学会代議員
- 日本体育学会 政策検討・諮問委員会委員

研究助成等

- “幼児の基本的動作習熟度及び活動動作水準に応じた運動プログラムのための基礎的研究”, 文部科学省科学研究費助成金基盤研究(C), (25350943), 100万円

綿田 博人 【教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

慶應義塾体育会副理事

慶應義塾高等学校野球部特別招聘コーチ

村山 光義 【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

野口和行, 村山光義, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子, “体育実技受講学生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討: 授業形態の違いによる比較”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 54(1): 9-16, 2015.1

(解説)

村山光義, “筋硬度研究の全体および計測法、硬さを測る意義 —硬さそのもの、hardness という概念について(特集 筋の硬さ: 曖昧なものをはっきりさせる時代へ)”, Sportsmedicine, 166号, 8-16, 2014.12

学会発表等

Murayama M, Nagaoka M, Uchiyama T, Yoneda T, “Hardness comparison of tissue-mimicking materials measured using different types of muscle-hardness meters” 19th Annual congress of the European College of Sport Science, Amsterdam (Netherlands), Book of abstracts p250, 2014.7

村山光義, 野口和行, 村松 憲, 板垣悦子, 東海林祐子, “体育実技履修学生の自己効力感及び社会的スキルの変化に関する検討(その3) 合宿形式の集中授業参加者を対象として”, 第65回日本体育学会(岩手大学), 予稿集 p116, 2014.8

村山光義, 稲見孝崇, 米田継武, “押圧型筋硬度計と超音波エラストグラフィによる上腕二頭筋硬度の比較” 第69回日本体力医学会(長崎大学), 体力科学63(6): P688, 2014.9

村山光義, 石手靖, 植田史生, 須田芳正, 福士徳文, “スポーツ科学分野の LLLT 研究トピック2014”, 第18回日本レーザー・スポーツ医科学学会・Annual Report (慶應義塾大学・横浜), 2014.12

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

村山光義, 慶應義塾大学・読売新聞社 市民講座「スポーツの見方・楽しみ方」講師, “「スポーツ文化からオリンピックを理解する」”, (慶應義塾大学・横浜), 2014.6

(シンポジウム)

村山光義, 慶應義塾大学体育研究所・(公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム「大学生をどう育てるか 教養体育からの発信」, コーディネーター (慶應義塾大学体育研究所基盤研究3班の活動として), (慶應義塾大学・横浜), 2014.11

(役職)

- ・慶應義塾大学日吉キャンパス Hiyoshi Research Portfolio 実行委員
- ・公益社団法人全国大学体育連合理事(総務部長)
- ・日本レーザー・スポーツ医科学学会 事務局代表
- ・一般社団法人日本バイアスロン連盟 科学委員
- ・日本オリンピック委員会強化スタッフ

研究助成等

“筋損傷後の筋硬度と elastography 法による筋弾性特性の関係”, 文部科学省科学研究費(基盤研究(C)), (課題番号: 25350822), 140万円

当年中の研究教育活動の概要

当年は、体育研究所内「基盤研究」3班の班長として、慶應義塾大学体育研究所・(公社)全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム「大学生をどう育てるか 教養体育からの発信」をコーディネートし、開催した。また、研究委員長として2014年度基盤研究報告書発行を推進した。個人研究として筋硬度計測をテーマに文部科学省科学研究費の助成を受け(2年目)、オーストラリアの Edith Cowan University に2回赴き、共同研究を推進した。

加藤 大仁 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(編著書)

日本バスケットボール協会(加藤敏弘, 加藤大仁他編著)『バスケットボール指導教本改訂版 上巻』大修館書店:2014年

(論文)

加藤大仁 “手段としてのスポーツ、目的としてのスポーツ：近年のスポーツ政策に関する一考察” 海外事情(拓殖大学海外事情研究所紀要) 第62巻11号:42-54頁, 2014年.

加藤大仁 “権利としてのスポーツ、政策としてのスポーツ” 慶應義塾大学体育研究所紀要 第54巻1号:1-8頁, 2015年.

永田直也, 山内賢, 佐々木玲子, 加藤大仁, 近藤明彦 “大学教養体育における運動・スポーツに対する動機づけと授業における動機づけ雰囲気の関係” 慶應義塾大学体育研究所紀要 第54巻1号:17-24頁, 2015年.

(報告書)

永田直也, 山内賢, 佐々木玲子, 加藤大仁, 近藤明彦 “大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的動機づけに貢献するか?—大学体育における動機づけ雰囲気の検討” 2014年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書:14-20頁, 2015年.

学会発表等

Nagata, N., Yamauchi, K., Sasaki, R., Kato, H., and Kondo, A “A Study of Validity of the Motivational Climate Questionnaire for College Physical Education” 第7回アジア南太平洋国際スポーツ心理学会大会, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2014年8月

永田直也, 山内賢, 佐々木玲子, 加藤大仁, 近藤明彦 “大学における教養体育の授業が学生の運動に対する動機づけに与える影響” 日本体育学会第65回大会, 岩手大学, 2014年8月

Nagata, N., Yamauchi, K., Sasaki, R., Kato, H., and Kondo, A “Relationship between the Motivational Climate and Motivation of Participation for Exercise in College Physical Education Classes” 第9回日独スポーツ科学会議, 慶應義塾大学, 2014年9月

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

加藤大仁 “日本体育協会公認スポーツ指導員養成講習会” さいたま市立大宮北高校, 2014年10月19日 依頼元 埼玉県バスケットボール協会

加藤大仁 “日本バスケットボール協会公認コーチ養成講習会” 庄和市民センター正風館, 2015年2月1日 依頼元 埼玉県バスケットボール協会

研究助成等

“現代日本における政治的潮流の変化とスポーツ政策の動向” 慶應義塾学事振興資金, 30万円

山内 賢 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

① 山内 賢, ポールウォーキングの運動処方を探る—反応時間と歩行速度の関係から導いた至適運動強度の提案—, ウォーキング研究, No18: p35-42 (2014).

② 永田直也 山内 賢 佐々木玲子 加藤大仁 近藤明彦, 体育実技受講学生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討—授業形態の違いによる比較—, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 第54巻 第1号: p17-24 (2015).

(執筆)

① 山内 賢

“一般化理論(グランドセオリー)でポールウォーキングを考える”, Walking PLUS vol7, 一般社団法人日本ポールウォーキング協会:p10-12, 2014年.

② 山内 賢

“ポールウォーキング Q & A”, Walking PLUS vol7, 一般社団法人日本ポールウォーキング協会:p13, 2014年.

(報告書)

永田直也, 山内 賢, 佐々木玲子, 加藤大仁, 近藤明彦 “大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的動機づけに貢献するか?—大学体育における動機づけ雰囲気の検討” 2014年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書:p14-20, 2015年.

学会発表等

① 田村浩司 山内 賢

“負荷の軽いアクアフィットネス(水中運動)のビデオ指導教材の開発”, 第73回日本公衆衛生学会総会
栃木県総合文化センター他(栃木県宇都宮市)
2014年11月5日・6日7日
日本公衆衛生雑誌第61巻・第10号特別付録 第73回日本公衆衛生学会総会抄録集
p267 (2014年10月)

② 山内 賢

ノルディックウォーキングとポールウォーキング実施による気分と反応時間向上の事例および運動処方
第34回日本看護科学学会学術集会
名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)
2014年11月29日・30日
第34回日本看護科学学会学術集会講演集 p560 (2014年11月)

③ 山内 賢 市河 勉 荻田 亮 柳川郁生 溝口絵里加 杉浦伸郎

高齢者が行うポールウォーキングの運動処方を探る
第69回日本体力医学会大会
長崎大学文教キャンパス他(長崎県長崎市)
2014年9月19日・20日・21日
第69回日本体力医学会大会予稿集 p211 (2014年8月)

④ 丸田 巖 山内 賢

男子高校生のBLS (Basic Life Support) 再講習に関する意識調査
第69回日本体力医学会大会
長崎大学文教キャンパス他(長崎県長崎市)
2014年9月19日・20日・21日
第69回日本体力医学会大会予稿集 p266 (2014年8月)

⑤ 山内 賢 柳川郁生 荻田 亮 溝口絵里加 市河 勉

高齢者がコーディネーショントレーニングを実施する場合の運動処方の秘訣を探る 反応能力向上の事例
日本体育学会第65回大会
岩手大学他(岩手県盛岡市)
2014年8月25日・26日・27日・28日
日本体育学会第65回大会予稿集 p352

⑥ 永田直也 山内 賢 佐々木玲子 加藤大仁 近藤明彦

大学における教養体育の授業が学生の運動に対する動機づけに与える影響
日本体育学会第65回大会
岩手大学他(岩手県盛岡市)
2014年8月25日・26日・27日・28日

日本体育学会第65回大会予稿集 p111

⑦ 丸田 巖 山内 賢

高等学校における BLS (Basic Life Support) 受講生の意識調査 男子高等学校 1 年生を対象として

日本体育学会第65回大会

岩手大学他 (岩手県盛岡市)

2014 年 8 月 25 日・26 日・27 日・28 日

日本体育学会第65回大会予稿集 p291

⑧ 山内 賢

ノルディックウォーキングとポールウォーキングにおける運動処方類似性と特殊性を探る

第18回日本ウォーキング学会大会

立命館大学 びわこ・くさつキャンパス (滋賀県草津市)

2014 年 5 月 31 日・6 月 1 日

第18回日本ウォーキング学会大会予稿集 p17

⑨ NAGATA Naoya, YAMAUCHI Ken, SASAKI Reiko, KATO Hirohito, and KONDO Akihiko

Relationship between the motivational climate and motivation of participation for exercise in college physical education classes.

The 9th Japan German Sport Science Symposium. The 9th Japan German Sport Science Symposium Organizing Committee.

慶應義塾大学 (神奈川県横浜市)

2014 年 9 月 18 日

⑩ NAGATA Naoya, YAMAUCHI Ken, SASAKI Reiko, KATO Hirohito, and KONDO Akihiko

A study of the validity of the motivational climate questionnaire for college physical education.

7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress.

Asian-South Pacific Association of Sport Psychology.

国立オリンピック記念青少年総合センター (東京都渋谷区代々木)

2014 年 8 月 8 日

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

① 山内 賢

健康をデザインするポールウォーキング

藤沢エデンの園プレミアムライフセミナー

崎陽軒本店 (神奈川県横浜市)

2014 年 11 月 20 日

② 山内 賢

ステップアップ企画「ポールウォーキング実践編」

藤沢エデンの園ポールウォーキング体験会

藤沢エデンの園かわせみホール・二番構公園 (神奈川県藤沢市大庭)

2015 年 1 月 16 日

③ 山内 賢

「ノルディックウォークとポールウォークその違いと無限なる可能性」「自己効力感考察：RPE と気分尺度を用いてポールウォーキングによる“適切な運動強度”を探る」

平成28年度リーダーズ CAMP in 長野「スポーツサイエンスセッション」

安藤百福センター (長野県小諸市)

2014 年 9 月 5 日・6 日・7 日

(講師)

山内 賢

ポールウォーキング (Pole walking) Positive (積極的) で Outlook (先見的) な Life (生活) を Enjoy (満喫) する Walking はいかがでしょうか？

スポーツ☆サイエンスフェスタ2015 in OCU

大阪市立大学 学術情報総合センター 10階 研究者交流室 (大阪市住吉区杉本)

2015年3月7日

研究助成等

- ① 体育に ICT 教育を導入する試み～シリアスゲームを用いた運動処方と体力測定の開発～

学事振興資金

200,000円

- ② 体育に ICT 教育を活用する試み 3～映像と運動強度から運動動作を自己評価する方法～

体育研究所内研究費

259,150円

当年中の研究教育活動の概要

山内は近年ポールウォーキングによる様々な運動効果を計測し、効率よい運動処方の作成を手掛けている。以下はポールウォーキングの運動処方作成に關与する今年度の成果である。

- ① 近年の家庭用ゲームの普及と進化は目覚ましく、ゲーム機を利用して健康管理や健康関連体力向上を意図したトレーニングができるような機種が登場している。例えば、ゲーム機のプログラムを改良 (ハッキング) することにより、ラボで行われてきた重心動揺の測定器と精度が変わらない安価で携帯性に優れた測定環境は、簡単に作り上げることが可能な時代に突入した。本年度の研究成果のひとつとして、Bluetooth の通信環境を利用して体重と重心動揺が計測できるゲーム機からのデータを PC に記録するプログラムを作成した。今後の分析に重心動揺計測プログラムを活用して、ポールウォーキングによるバランス機能向上の可能性とエビデンスを追及していく。
- ② 時間、回数で運動能力を評価することは一般的である。しかし、どのようにしてその能力 (記録) が発揮されたのかを探る評価は稀である。前者は量的であり、後者は質的な議論である。量的な結果には質的な理由が付きものであり、それを確かめるために映像による分析がしばしば用いられる。山内は映像による質的分析にウェアラブルカメラと称する身体の一部に装着して撮影するカメラに注目した。そして、以前に創作した 2 画面同時再生ソフトを流用することにより、「現状と過去」のギャップの発見や「全体と部分」の同時観察による比較評価ができるので、学習者は動きに関する新たな運動様相の質的な「ひらめき」を感じる「学び」の瞬間が体験できると考えられる。今後の研究課題は、ウェアラブルカメラによる映像を「学習者にどのように、どの部位を全体像と組み合わせて見せれば、ポールウォーキングを運動学的に分析するための効果的な補助手段になるか？」を意図した撮影画角の意匠にチャレンジして、ポールウォーキングの画像教材を作成することである。

吉田 泰将 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(執筆)

- ・吉田泰将 他, “テーピングの実際”, 剣道医学 Q&A, 全日本剣道連盟: 31-35, 2014.12.

(報告書)

- ・石手靖 他, “研究を通じた塾体育会の支援策—タレント識別手法の検討—” 慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書, 慶應義塾大学体育研究所: 21-24, 2015.3.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・日本武道学会 評議員 通年
- ・一般財団法人全日本剣道連盟 評議員 通年
- ・一般財団法人全日本剣道連盟 社会体育指導員委員会・委員 講習会 講師 通年
- ・一般財団法人全日本学校剣道連盟 常任理事・事務局長 通年
- ・第56回全国教職員剣道大会 総務委員長 (2014.8.9)
- ・第7回全日本学連剣友剣道大会 大会委員 (2015.3.22)
- ・全日本学生剣道連盟・関東学生剣道連盟 審判員 通年
- ・全日本学連剣友会 事務局長 通年
- ・関東学連剣友連合会 理事長 通年
- ・東京学連剣友連合会 理事 通年
- ・慶應義塾体育会剣道部(三田剣友会) 副師範 通年
- ・慶應義塾大学医学部体育会剣道部 師範代行 通年

(資格)

- ・一般財団法人 全日本剣道連盟 剣道教士八段

(大会出場)

- ・第14回 寛仁親王杯剣道八段選抜剣道大会 (2014.9.6)

当年中の研究教育活動の概要

スポーツ技術向上に寄与する指導プログラムの開発を課題としてモーションセンサを用いた剣道竹刀の素振り評価システムの開発と映像の即時フィードバックによる技術指導の効果について検討を続けている。

また、文部科学省委託事業・武道等指導支援強化委員会の委員として、中学校授業協力者の養成とデータベースの構築や授業協力者を活用した授業の視察を行い、さらにアンケート調査やインタビューにより現場の実態を明らかにしていく活動を行っている。

板垣 悦子 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

野口和行, 村山光義, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子, “体育実技履修学生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討—授業形態の違いによる比較—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 54 (1): 9-16, 2015.

(研究資料)

- ・板垣 悦子, “アメリカの大学におけるヘルスプロモーションの取り組み—カリフォルニア州立サンノゼ大学の事例—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 第54巻: p25-32, 2015年1月

学会発表等

- ・村山光義, 野口和行, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子 “体育実技履修学生の自己効力感及び社会的スキルの変容に関する基礎的検討(その3) 合宿形式の集中授業参加者を対象として” 日本体育学会第65回大会, 岩手, 2014年8月.
- ・板垣 悦子, “アメリカ合衆国におけるセルフメディケーション—カリフォルニア州一大学と各市の取り組み—”, 日本セルフメディケーション学会, 池袋サンシャインシティ文化会館, 2014年11月1日~2日, 講演要旨集 p69

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・板垣 悦子, “健康づくり教室”,
慶應義塾大学薬学部, 港区スポーツふれあい文化健康財団
2014年4月～2015年1月,
4/18、5/16、6/20、7/18、8/22、9/26、10/24、11/14、12/19、1/16

当年中の研究教育活動の概要

本年度より開講している「ピラティス」授業における経験が大学生の心身に与える効果を探る一つとして、留学先であったカリフォルニア州立サンノゼ大学の学生および本学学生に、毎回授業の最後に「気づき」などのジャーナルを記入してもらったものをまとめる予定であり、現在はピラティス効果の研究論文の整理を行っている。

加藤 幸司 【准教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・平成26年度 公益財団法人日本体育協会公認コーチ専門科目(後期)講習会講師(バドミントン), 埼玉, 2015年1月
- ・平成26年度 公益財団法人日本体育協会公認指導員養成講習会講師(専門科目), 神奈川, 2014年11月
- ・早稲田大学オープン教育センター講師(非常勤), 通年

(役職)

- ・慶應義塾大学体育会バドミントン部女子監督, 埼玉, 2015年1月

須田 芳正 【准教授】

学会発表等

- ・松山博明、須田芳正 他“海外指導者派遣事業の現状と課題 JFA アジア貢献事業の派遣指導者に着目して”, 日本体育学会, 岩手大学, 2014,8.
- ・村山光義, 石手靖, 植田史生, 須田芳正, 福士徳文, “スポーツ科学分野の LLLT 研究トピック2014”, 第18回日本レーザー・スポーツ医科学学会・Annual Report (慶應義塾大学・横浜), 2014.12

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・早稲田大学オープン教育センター講師(非常勤), 通年

(役職)

- ・慶應義塾大学体育会サッカー部監督

野口 和行 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(著書)

- ・石田易司, 竹内靖子, 野口和行 “自閉症と豊かな暮らし—キャンプロイヤルから学ぶ—”, 晃洋書房, Pp.194, 2014.

(論文)

- ・野口和行, 村山光義, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子 “体育実技受講学生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討—授業形態の違いによる比較—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 54(1):9-16, 2015.

(執筆)

- ・野口和行, “紙上キャンプアカデミー スペシャルニーズキャンプの意義”, キャンピング, 161:2-3. (公社)日本キャンプ協会, 2014.

学会発表等

- ・石田易司, 竹内靖子, 野口和行 “自閉症と豊かな暮らし—キャンプロイヤルから学ぶ—” 日本野外教育学会第17回大会自主企画シンポジウム, 東京, 2014年6月.
- ・村山光義, 野口和行, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子 “体育実技履修学生の自己効力感及び社会的スキルの変容に関する基礎的検討(その3) 合宿形式の集中授業参加者を対象として” 日本体育学会第65回大会, 岩手, 2014年8月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・(公財)日本教育科学研究所アウトドアゲーム指導法講習会, 国立磐梯青少年交流の家, 2014年10月.
- ・(公社)日本キャンプ協会ディレクターゼミナール, 北翔大学, 2014年10月.
- ・(公社)日本キャンプ協会ディレクターゼミナール, 福岡大学, 2014年11月.
- ・(公社)日本キャンプ協会ディレクターゼミナール, 大阪市社会福祉センター, 2014年11月.
- ・自然体験活動指導者養成研修会, “自然体験活動の指導” 国立磐梯青少年交流の家, 2014年11月.

(役職)

- ・大学スケート研究会理事長
- ・(公財)日本教育科学研究所自然体験活動推進委員
- ・(公社)日本キャンプ協会キャンピング編集タスク

村松 憲 【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

村松憲, 高橋仁大, 梅林薫, “世界トップクラステニス選手のサービスにおける速度と回転量の関係について”, テニスの科学, 23:1-7, 2015.

野口和行, 村山光義, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子, “体育実技履修学生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討—授業形態の違いによる比較—”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 54(1):9-16, 2015.

学会発表等

- ・村山光義, 野口和行, 村松憲, 板垣悦子, 東海林祐子 “体育実技履修学生の自己効力感及び社会的スキルの変容に関する基礎的検討(その3) 合宿形式の集中授業参加者を対象として” 日本体育学会第65回大会, 岩手, 2014年8月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

村松憲, “通信制教育課程における教養体育”, 第3回大学体育研究フォーラム, 筑波大学東京キャンパス文教校舎, 2015年2月10日

(役職)

- ・公益財団法人日本オリンピック委員会強化スタッフ(情報・戦略スタッフ), 通年
- ・公益財団法人日本テニス協会 医・科学委員会委員, 通年
- ・日本テニス学会運営委員(審査担当兼編集委員), 通年

当年中の研究教育活動の概要

ここ数年取り組んできた、世界トップレベルテニスにおけるボールの回転量とボール速度の関係について、ようやく論文として発表することができた。トップレベル選手のデータということで撮影の許可やデータ使用の許可など様々なハードルがあったが、数多くの方々のご協力で発表にこぎつけることができた。今

後、大学授業や競技力向上の現場に更に役立つよう取り組みを続けていきたい。また「楽しむ」ことを最大の目標に置いているテニス実技授業において、前年度に引き続いて「感謝できることをみつける」という実習を毎回授業開始時に行った。学期終了時の無記名アンケートにおいてこの実習に対する肯定的な意見が多く見られたことから、実技時間を減らしてまでこの実習を行うことに対する理解が概ね得られていると感じた。今後も取り組みを続けていく予定である。体育研究所内の「基盤研究」では、「自己効力感及び社会的スキルの向上に寄与する体育実技プログラムの開発」をテーマに調査・検討を行った。

鳥海 崇 【専任講師】

学会発表等

- ・鳥海崇, “競泳・水球・飛込選手の部位別左右別身体組成の比較研究”, 日本水泳・水中運動学会, 名古屋, 2014.11
- ・Takashi Toriumi, Hideki Fujimoto, Norihumi Fukushi, Yasushi Ishide, “Study of the Assessment of Body Composition in Japanese College Athletes”, International Journal of Arts and Sciences, Valletta, Malta, 2015.3.
- ・Takashi Toriumi, Toshiaki Sakai, Koji Kato, Yoshimasa Suda, Yasushi Ishide, “Talent Identification for College Athletes by Using their Body Composition” The IAFOR International Conference on Education, Dubai, 2015.3.

奥山 静代 【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(その他)

- ・加賀谷淳子, 奥山静代, 中村芙美子 “ウォーキングと自転車の平均血流速度の違い” 脱・高血圧の「超」特効ワザ. NHK ためしてガッテン, 主婦と生活者: 86頁, 2015年3月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・健康・スポーツ科学女性研究者ネットワーク (NeWS) 世話人

坂井 利彰 【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(著書)

- ・坂井利彰, “テニス世界トップ10も実践する最新の打ち方・戦い方” 東邦出版, 2014年11月

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・公益財団法人世田谷区スポーツ振興財団・こどもの体力・基礎運動能力向上事業・世田谷区ジュニアアカデミー (テニス) 総合監修及び講師

(講演)

- ・公益財団法人日本テニス協会コーチングカンファレンス『データを活用した育成戦略モデル～世界トップ100入りするための早熟型モデルと晩成型モデル～』, 2015年3月

(役職)

- ・慶應義塾大学体育会庭球部監督
- ・慶應チャレンジャー国際テニストーナメント (慶應義塾主催) トーナメントディレクター
- ・公益財団法人日本プロテニス協会 理事 (国際委員会副委員長)

永田 直也 【助教 (有期)】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・永田直也・山内賢・佐々木玲子・加藤大仁・近藤明彦, “大学教養体育における運動・スポーツに対する動機づけと授業における動機づけ雰囲気の関係”, 慶應義塾大学体育研究所紀要, 54: 17-24, 2015.

学会発表等

- ・Nagata, N., Yamauchi, K., Sasaki, R., Kato, H., and Kondo, A. “Relationship between the motivational climate and motivation of participation for exercise in college physical education classes”, The 9th German-Japan Sport Science Symposium, Kanagawa, 2014年09月.
- ・Nagata, N., Yamauchi, K., Sasaki, R., Kato, H., and Kondo, A. “A study of the validity of the motivational climate questionnaire for college physical education”, 7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress, Tokyo, 2014年08月.
- ・永田直也・山内賢・佐々木玲子・加藤大仁・近藤明彦, “大学における教養体育の授業が学生の運動に対する動機づけに与える影響”, 日本体育学会第65回大会, 岩手, 2014年08月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・“How to 心理サポート”, 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会主催 平成26年度日本パラリンピック委員会医・科学・情報サポート推進事業集中開催教育プログラム, 東京, 2014年7月.
- ・“職場で活用, スポーツメンタルトレーニング”, 一般社団法人立川労働基準協会主催労務・衛生講習会, 東京, 2014年9月.
- ・公益財団法人東京都スポーツ文化事業団主催 平成26年度メンタルトレーニングセミナー, 東京, 2014年9月.
- ・“スポーツ心理学”, 公益社団法人東京都障害者スポーツ協会主催 平成26年度中級スポーツ指導員養成講習会, 東京, 2014年11月.

(フィールドワーク)

- ・公益財団法人日本障がい者スポーツ協会日本パラリンピック委員会 平成26年度障がい者競技スポーツ医・科学・情報サポート推進事業競技団体サポートスタッフ (心理サポート).
- ・マルチサポート事業 (パラリンピック競技) 仁川マルチサポート・ハウスにおける心理サポートスタッフ, 2014年10月.

当年中の研究教育活動の概要

当年は、体育研究所での研究教育活動3年目であった。

研究活動は、これまで行ってきた「プリ・パフォーマンス・ルーティン (PPR)」をテーマにした研究に加え、「スポーツ選手の注意配分能力」についての研究を開始した。まだ予備測定の繰り返しではあるが、継続的な活動によって研究課題とする現象を1つずつ明らかにしていく。また、基盤研究コアテーマ①「FD実践としての体育授業プログラムの在り方」2班の活動では、大学体育における体育・スポーツ活動と動機づけ、動機づけ雰囲気の関係について、現状を調査した。その結果は、原著論文を1編、国際学会発表を2件、国内学会発表を1件と複数の発表機会において、多面的に報告を行った。動機づけ雰囲気に関する従来の研究では、大学体育において調査を実施した報告はなく、適した測定尺度も見当たらない。今後は、この点を解決した後に介入研究へと移っていくことを計画している。

教育活動では、授業のみならず様々なイベントにおいて塾生の活動に携わった。塾生が主体となったイベント運営をすることにより、授業だけでは学ぶことが難しい企画、交渉、運営などを塾生とともに学ぶことができた。次年度は、定期的なイベント活動だけではなく、自身が主体的に取り組む活動を行っていきたい。

福士 徳文 【助教(有期)】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・境広志, 武藤健一郎, 稲葉佳奈子, 三浦康二, 飯田義明, 岩嶋孝夫, 大北文生, 岡田光弘, 川上哲, 川田尚弘, 小谷究, 重藤誠市郎, 志村広子, 鈴木雄太, 武田丈太郎, 椿原徹也, 中村大輔, 中村哲也, 中山勝廣, 伴好彦, 福井真司, 福士徳文, 望月康司, 守田誠, 渡邊新一郎, 渡邊隆嗣, 渡邊典子, “成蹊大学 成蹊教養カリキュラム コア科目「健康・スポーツの基礎」の授業実践とその効果と検証”, 成蹊大学一般研究報告, 第48巻第4分冊, 2014.7

学会発表等

- ・福士徳文, 櫻庭景植, 吉村雅文, 窪田敦之, 青葉幸洋, 藤田真平, “ターン動作における足底圧と下肢筋力の関係～第5中足骨疲労骨折との関連を中心に～”, 日本体育学会第65回大会, (岩手大学・盛岡), 2014.8
- ・福士徳文, 吉村雅文, 青葉幸洋, 島寄佑, “人工芝と天然芝で行うターン動作における足底圧の相違～第5中足骨疲労骨折との関連を中心に～”, 第18回日本レーザー・スポーツ医科学学会(慶應義塾大学・横浜), 2014.12
- ・村山光義, 石手靖, 植田史生, 須田芳正, 福士徳文, “スポーツ科学分野の LLLT 研究トピック2014”, 第18回日本レーザー・スポーツ医科学学会・研究レポート(慶應義塾大学・横浜), 2014.12

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・福士徳文, “盛岡市立厨川中学校 平成26年度第2回北梅講演会 「将来に向けて今やるべきこと」”, 盛岡市立厨川中学校, 平成26年8月29日

(講師)

- ・順天堂大学医療看護学部「野外スポーツ実習(スキー)」非常勤講師, 山形県蔵王温泉スキー場, 平成27年2月24日～2月28日

(役職)

- ・公益社団法人全国大学体育連合総務部委員
- ・慶應義塾大学体育会サッカー部コーチ

研究助成等

- ・“足趾把持筋力と第5中足骨疲労骨折の関係の検討～シーズンの期分けに着目して～”, 平成26年度浅野均一記念研究奨励金, 25万円
- ・“女子サッカーの競技力向上を目指して”, 文部科学省科学研究費(基盤研究C), (24500754), 5万円. 研究代表者: 吉村雅文(順天堂大学)

当年中の研究教育活動の概要

当年の研究活動は、予てよりテーマにしているサッカー選手の傷害予防(第5中足骨疲労骨折)に向けた研究として、新たに足趾把持筋力に着目し研究を進めた。教育活動については、慶應義塾、ならびに体育研究所の教育理念を理解し、授業やイベント等を通して塾生の成長に貢献できるよう心掛けた。

2. 所内定例研究会発表会要旨

第1回 4月15日

板垣 悦子

留学報告（カリフォルニア州立サンノゼ大学におけるヘルスプロモーションの取り組み）

カリフォルニア州立サンノゼ大学におけるヘルスプロモーションの取り組みについて、特に身体活動に関わる調査を行った。健康関連部署の連携による大規模な健康イベントの開催や、全学部の保健体育科目の必修、多数の健康関連講座開講、学生スタッフによるスポーツ施設の年中無休運営や安価での施設開放、各種運動イベントの通年開催および職員へのインタビューなどから、日常的に「運動すること」での健康維持・増進を大学が重要視していることが分かった。すなわち全学が学生に対して積極的に運動を行なえる環境作りをサポートしていることが、カリフォルニア州立サンノゼ大学におけるヘルスプロモーションの取り組みであった。アメリカ人の健康に対する意識は、自分の健康は自ら守るものであるとの意識が日本人に比べて極めて高いのではないかとも思われた。日本においても大学全体で学生が運動を気軽に、いつでも、どこでも行える環境づくりの整備をすることが重要であると考えられた。

第2回 5月27日

福士 徳文

人工芝と天然芝上で行うターン動作における足底圧の相違～第5中足骨疲労骨折との関連を中心に～

【目的】 サッカー競技中に多くみられるターン動作における足底圧の変化について、天然芝と人工芝で、比較検討を行った。これらの結果から、人工芝の普及とともに近年増加傾向にある第5中足骨疲労骨折との関連について考察した。

【方法】 関東大学サッカー1部リーグに所属

する男子サッカー部員9名（平均20.6歳）を対象とした。往復20mの折り返し走を新人工芝、敷設から5年以上経過した旧人工芝および天然芝上にて全力で行わせた。ターン時の軸脚（内側脚）が左脚となるように統一した。足底圧分布測定システム（ニッタ社製）を用いて、内側脚の平均荷重値と最も高い圧力（ピーク圧）を計測した。足底面を6つのエリア（A1～A6）に区分し各エリアで評価した。

【結果】 すべての条件において、小指球周辺のエリア（A3）の平均荷重値が最も高かった。しかし、天然芝ではA3以外のエリアでも高い荷重値がみられた。また、A3のピーク圧は新・旧人工芝のほうが天然芝より有意に高かった（新人工芝： $2.62 \pm 0.77 \text{kg/cm}^2$ ，旧人工芝： $2.36 \pm 1.07 \text{kg/cm}^2$ ，天然芝： $2.00 \pm 0.55 \text{kg/cm}^2$ ， $p < 0.05$ ）。

【考察】 第5中足骨疲労骨折の発症に関しては、足底外側に過剰な負荷がかかることが原因の一つとされている。本研究においても、ターン動作の内側脚で、小指球周辺に高い圧力がみられた。また、天然芝では荷重の分散がみられたが、人工芝では荷重の分散はみられなかった。滑り抵抗が高く、粘稠な人工芝上でのターン動作において、小指球周辺に高い圧力が集中することは第5中足骨疲労骨折発生の一要因と考える。

第3回 6月24日

加藤 大仁

現代日本における政治的潮流の変化とスポーツ政策の動向 #01

現代日本における政治的潮流の変化とスポーツ政策の2006年の半ば以降、俄かに「スポーツ立国」に関する議論が始められ、2010年に入ると「スポーツ立国戦略」が打ち出された。その後スポーツ基本法が制定され、昨年9月には2020年夏季オリンピックの東京招致に成功した。スポーツによる立国を目

指すという議論は、オリンピック招致活動を背景に、スポーツ基本法を制定するという形に収斂し、東京でのオリンピック招致まで漕ぎ着けたと言えよう。

しかし、昨年度の研究会発表でも述べたように、社会科学の中では公共性に関して最も明快な定義を与えていると考えられる経済学の概念をもってしても、スポーツが国の政策課題とされるべきか否かという点に関する明確な回答を得ることはできない。実際、スポーツを政策課題として取り上げるか否か、あるいはスポーツ振興のためにどの程度の予算を配分するかといったことは、政治的な決定に委ねられている。また、通俗的な理解では政府によって供給されているものが公共財と看做されているように、スポーツの場合も政治的にその必要性が認識されることを通じて公共性が与えられているというのが実情なのである。となれば、スポーツが政策課題となる理由を明らかにする必要がある。

ところで、キングダムの政策の窓モデルによれば、問題、政策、政治の3つの流れが合流した時に政策の窓が開き、特定の政策が選択されることになる。このモデルに沿って考えると、国際競技会での不振やスポーツ関連予算が十分に確保されていないことは広く認識されていたし、1990年代に行われたスポーツ振興くじを巡る議論を通じて、スポーツ政策に関心を持つ政治家が一定の勢力を持ち始めていたことなどを指摘することもできよう。

その一方で、スポーツ立国が初めて唱えられたのは、任期中の改憲を唱え、教育基本法の改正など、所謂新保守主義的な傾向を持つ第1次安倍政権の時代であったことには注目しておく必要がある。小泉政権時代に展開された新自由主義的な経済政策を基に考えれば、スポーツ活動自体も民間に任せるべきであり、例えトップアスリートであっても資金調達などは自ら行うべきだという方向に議論

が進む可能性もあった筈である。

安倍政権発足時の状況を振り返ると、少なくとも保守的な考えを持つ政治家の間では、格差の拡大や貧困層の増加、家族や終身雇用の崩壊など、これまで社会的な統合を維持するための仕組みが緩みつつあるとの認識が共有されていたと考えられる。また、新自由主義的な政策を志向するという意味では自民党とあまり違いがない民主党との差別化を図るためにも、新保守主義的な政策を推し進めることにはそれなりの意味があったといえよう。このような思潮はスポーツ政策にも反映され、トップアスリートが活躍することを通じて、日本人としてのプライドや自信を自覚させるという考えが示された可能性は高い。

今後も引き続き、1990年代から2000年代にかけての政治的な潮流をトレースし、何故スポーツ基本法がトップアスリートや国際競技会の招致を優先する形のものとなったのか、その政治社会的な背景を探りたいと考えている。

第3回 6月24日

山内 賢

運動学習にICT教育を活用する試み2～2つの映像情報を組み合わせた画像観察の効能～

発表内容は、非接触型運動観察システムの開発について、今どこまですすんでいるかの紹介とシステムの体験で構成した。

現実の世界で実現できないことをバーチャル空間で表現する試みはコンシューマーゲームの中でよく見られる。現実とバーチャルは表現や現象に実感的な距離があると思われがちであるが、近年では両方のギャップを埋める試みとする複合現実と呼ばれる考え方が生まれている。これは現実もしくは仮想の単体で表現するだけではなく、現実を仮想あるいは仮想を現実として表現する試みを両側から歩み寄ろうとする新たな発想であり、拡張現実(仮想)感への挑戦である。しかしながら

画像と実際の身体活動のギャップの埋め合わせはまだままであり、その点をフォローする発想で登場したのが Microsoft 社の Kinect センサの登場である。Kinect は 2010 年に発売されたゲームに付属する赤外線を使用した Depth sensor や RGB camera を用いて、motion sensing や世界初の距離を測ることができる画期的な発明品であり、単なるゲーム機にとどまらず、新たなアプリケーションの開発と組み合わせることでトレーニングやリハビリテーション分野での活動評価に応用できると考えられる。そこで、山内はこれまでの研究会で公表してきたセルフ計測式体力測定システム、超鏡による画像合成システムおよび 2 画面の同時再生ソフトの開発と Kinect を組み合わせることを試みて、非接触型の体力測定環境や姿勢および動作観察環境を可能にした。

具体的な開発内容を以下に記述する。

- 肩のライン (オレンジライン) を計測して身体の揺らぎやゆがみを評価できる
- スクワット時の、つま先と膝の位置関係を使った姿勢評価として、膝がつま先より前に出ると線の色が変わり、音で警告する。
- 「頭部の上下移動量」「手足の前後移動量」「腰、膝、足の高さ」「膝の移動軌跡や面積」を計測できる。
- 最大一步を測定できる。

第 4 回 7 月 8 日

村松 憲・板垣悦子・村山光義・野口和行・東海林祐子

[基盤研究 1-1] 自己効力感及び社会的スキルの向上に寄与する体育実技プログラムの開発

昨年度から続いている本研究はこれまで、ウィークリースポーツに焦点をあてていたが「合宿形式のシーズンスポーツは、自己効力感と社会的スキルにどのような影響を及ぼすか？」という点を明らかにする試みを行った。シーズンスポーツ「アウトドア」「スキー」

「スケート」「マリンスポーツ」「ヨット」「山岳」「馬術」7 種目の参加学生に対して自己効力感と社会的スキルのアンケートを実施した。分散分析を行った結果、自己効力感においても社会的スキルにおいても、1 回目と 2 回目の得点に有意差が有る一方、種目間の有意差は無かった。また、交互作用は見られなかった。これらのことから、合宿形式のシーズンスポーツが、自己効力感や社会的スキルを向上させる可能性が考えられた。

また、これまで SFC キャンパスで行われてきた「ライフスキル」アンケートを、日吉キャンパスでも実施した。「目標設定」「コミュニケーション」「ストレスマネジメント」「体調管理」「最善の努力」「礼儀・マナー」「責任ある行動」「考える力」「謙虚な心」「感謝する心」という 10 項目について授業期間の最初と最後にそれぞれアンケートを実施した。その結果、「礼儀・マナー」「感謝する心」の 2 項目について、SFC キャンパスと異なる結果がみられた。この原因について現在検討中である。

自己効力感・社会的スキル・ライフスキルなどの授業期間前後の点数変化が体育実技授業によるものなのか、あるいはそれ以外の影響によるものなのか、という点も検討が必要である。また、教員がこれらの得点を向上させるために積極的に介入を行う場合とそうでない場合の比較についても、検討が必要であると考えられる。

第 4 回 7 月 8 日

山内 賢・佐々木玲子・加藤大仁・永田直也・近藤明彦

[基盤研究 1-2] 大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的な動機づけに貢献するか？

—大学体育における動機づけ雰囲気の検討—

基盤研究 1-2 班は、「大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的

な動機づけに貢献するか？—大学体育における動機づけ雰囲気の検討—と題し、体育科目と動機づけの関係の検討をすすめている。平成25年度は、動機づけと動機づけ雰囲気を測定する尺度の検証を行い、大学の体育科目と動機づけの関係を検討した。

総数426名に調査を実施した結果、動機づけ雰囲気を測定する尺度は、大学生に合わせたものを新たに作成する必要があることがわかった。また、既存の尺度を変更して測定した結果、塾生の運動・スポーツに対する動機づけを高めるには、熟達志向的雰囲気で授業が行われることが効果的であることがわかった。この動機づけ雰囲気は教員の指導に影響することから、大学生においても運動・スポーツに対する動機づけを高めるには、教員が熟達志向な働きかけを行うことが良いと推察される。

今後は、大学体育において動機づけ雰囲気を測定する尺度の開発と、教員の介入法の検討を進めていく。

第4回 7月8日

基盤研究第2班 鳥海 崇

体育研究所基盤研究テーマ別グループの進捗状況 コアテーマ② 学生スポーツの行動と大学におけるスポーツ「一般学生の体力・運動能力に関する測定データを管理分析するシステム構築」

本テーマ班は大きく分けてさらに3つの小テーマに分類される。

1. 体力測定の結果の活用に関する産学連携プロジェクト
2. 体力測定・身体組成測定とタレント識別プロジェクト
3. 新たなスポーツ文化の醸成

昨年度の中間発表では上述1.の小テーマについて報告したため、今回は2.の小テーマについての現状報告を行った。

体力測定に関しては本年度4月にHAPP(教

養研究センター日吉行事企画委員会)の新入生歓迎行事と共催で「日吉キャンパス体力測定～君の秘めた能力を探せ～」を実施した。

1. 測定に必要な機材の購入・準備
2. 事前準備として体育会部員を対象とした測定の実施
3. 新入生の測定の実施

上記3点を目的として実施したが、肝心の3.については回収できたデータ数が十分多いとは言えない状況であった。

身体組成測定に関してはIn bodyを用いて体育会部員を対象に測定した。

測定済み：庭球部、剣道部、サッカー部、水泳部水球部門

測定予定：バレーボール部、野球部、準硬式野球部、バトミントン部

総データ数約300を回収見込みであり、これらを基に各競技における身体組成の共通点と相違点について議論する予定である。

第4回 7月8日

基盤研究第3班 村山光義

体育研究所基盤研究テーマ別グループの進捗状況 コアテーマ③ 大学体育の教育理念とカリキュラム「大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る」

本テーマ班の進捗状況として、昨年度に引き続き関連書籍のレビューから課題の分類・検討を行った。レビューした書籍は文末の通りである。その中で、DavisとWilsonによる、大学における授業改善アイデアの紹介は興味深いものであった。「大学における教育」として、一般講義の取り組みにヒントを得て、「大学体育」における授業改善策を取りまとめてみることも重要であると考えられた。そこで、こうした、教育という視点に立ち、大学体育役割を考えるシンポジウムを秋に企画することを準備中である。仮テーマとしては「大学生をどう育てるか 教養体育からの発信」とし、他大学の取り組みの紹介と

塾の現状分析を行い、討論したいと考えている。

レビューした書籍：

岡部光明「大学生の品格」プリンストン流の教養24の指針、日本評論社、2013

田中每実（武庫川女子大学）“なぜ「教育」が「問題」として浮上してきたのか”、広田照幸他編 シリーズ 大学 第5巻 教育する大学—何が求められているのか、岩波書店、2013

友添秀則・岡出美則（編）教養としての体育原理 現代の体育スポーツを考えるために、大修館書店、2005

B.G.Davis, L.Wood and R.Wilson、香取草之助 監訳 授業をどうする！カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集 ABC's of Teaching with Excellence：Teaching Innovation and Evaluation Services, University of California. 東海大学出版会、1995

第5回 10月21日

坂井 利彰

世界男子プロテニス界の構造と日本人選手の強化策

スポーツにおいて長期目標（世界ランキング100位にランクインなど）を定めて達成するためには短期目標の達成の積み重ねが有効であるといわれているが、日本テニス協会が実施する強化指針では具体的な目標達成ステップは定められておらず、世界的にもそのような例はみられない。テニスは対人スポーツであり、タイムや距離などの記録を伸ばしていくスポーツよりも、長期目標を見据えた具体的な短期目標を設定しにくいという実情がある。

スポーツのパフォーマンスと年齢の関係についての研究は、年齢と適正な練習内容の関係や、加齢による身体能力の低下などというように特定の年齢時について検討するものが

多く、選手キャリアの形成を目的とした各年齢時を統括的な視点で俯瞰する研究はこれまでに行われていない

世界男子テニスに関する研究において、世界ランキング100位にランクインした年齢との選手の生涯最高ランキングが強く正の相関を示すこと、その要因としてATPツアーの構造が10代で100位にランクインした“早熟”な選手に有利に働いていることを明らかにした。

その結果は同時に、10代のランキングや出場大会が後の選手キャリアを決定付けている可能性を示唆している。つまり、各年齢時の短期目標を設定し達成していくという過程は、選手のパフォーマンスを向上させるという目標達成理論における役割だけでなく、ATPツアーの構造に長期目標の達成を阻まれないためにも不可欠であると考えられる。

世界ランキングだけでなく選手の成長過程などの指標を活用した研究の内容を多角的に考察した上で、今後の研究に繋げていくことを目指す。

第6回 11月14日

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科

森 文彦

マウスガードによる外傷予防及びスポーツパフォーマンスについて

1. マウスガードについて概説

マウスガードはアメリカンフットボールや空手といったコンタクトスポーツにおいては装着を義務付ける競技が増えてきているように、口腔内外の外傷予防として一定の効果を上げている。しかし現在では着けていけばよい、と考える選手のために安価ではあるが安全性に疑問が残るマウスガードが世に出ている実態もある。

2. 現状のマウスガード研究のレビュー

マウスガードの研究として最も多いのが外

傷予防としての効果測定であり、数ある競技の中でもラグビーを題材として扱っている研究が最も多い。これは我が国においてはラグビーを中心にマウスガードが普及していったという点と関連がある。

なお、外傷予防としての効果測定に関しては、マウスガードを装着した場合としなかった場合とで実験すると、倫理的問題が発生するため、方法としては、怪我が発生した場合、マウスガードを装着していたか否か、その際の怪我の度合いはどうか、といったアンケートを実施するという後ろ向き手法がとられている。

基盤研究2班の今後の研究計画として

3. マウスガードによる外傷予防啓発

大学内においてもコンタクトスポーツを実施している体育会は多数あり、その多くが専門的知識なくマウスガードを装着している。安全性を軽視して安価なマウスガードを装着している選手が多くいることが予想される。そこで体育会各部のマウスガードの着用実態とその安全性についてアンケート調査を実施し、マウスガードについての知識を深めることで体育会部員の外傷予防の一助としていく。

4. マウスガードによるパフォーマンス向上

体育会各部の早慶戦はその大半が僅差で勝負が決まっている。その僅差を埋めるために各部選手は日頃から多大な努力をしているが、基盤研究2班としては研究の力でその僅差を埋めてみたいと考える。具体的には各競技においてマウスガードを装着することによるパフォーマンス向上の有無を調べ、効果があった競技に関しては積極的にマウスガードの装着を勧め、競技力向上の一助としていく。

第7回 12月16日

永田 直也

アジアパラ競技会・マルチサポートハウスにおけるサポート活動報告

本発表では、平成26年10月18-24日に開催されたインチョンアジアパラ競技会において設置された、マルチサポートハウスにおける活動報告を行った。マルチサポートハウスでは、心理、栄養、リハビリプール、映像技術と、選手団本部の選手支援機能を補完する役割を担った。

利用した選手からは、コンディショニングに大いに役だったとの報告がある一方で、多くの課題が存在している。サポート内容の根拠となる科学的裏付けが少ないこと、サポート内容がパフォーマンスにどのような影響を及ぼしたのかというデータが少ないこと等、障がいのあるハイパフォーマンスアスリートを対象とした資料が不足していることが主な課題である。

まだ始まったばかりの活動ではあるが、根拠に基づいたサポート活動が実施できるよう、研究と実践の両輪での活動が必要となる。

第8回 1月20日

浜田 均「株式会社 若洲」

スポーツを取り巻くビジネスの世界

スポーツ体育の指導者にとってスポーツを科学的な研究対象として取り扱うことや教育手段として考えることが日常である。しかしながらオリンピックを始めとして巨大イベントとなったスポーツはビジネスと深く関わりを持ち競技団体、行政、メディア、関連業者による一大プロジェクトとして展開されている。今回は研究者・教育者としては中々知り得ないスポーツを取り巻くビジネスの世界の実情について豊富な経験を持つ浜田均さんを迎えて同氏の経験談を聞いた。教育・研究者として様々なスポーツ

イベントをどのように理解すれば良いかについて議論が進められた。

講演者略歴：

1977年慶應義塾大学卒業、三越百貨店勤務、2014年より株式会社若洲勤務。1989年三越がオリンピック公式スポンサーシップ（バルセロナオリンピック、JOC がんばれニッポン）参加に伴い IOC 東京総会（後にパリに変更）担当者を皮切りに、以降各種スポーツイベントに深く関わる。1990年（北京アジア大会）、1991年世界陸上東京大会（出向：組織委員会総務部長）、1992年バルセロナオリンピック、アルベールビル冬期オリンピック、1994年リレハンメル冬季オリンピック、1998年長野オリンピック（出向：組織委員会業務部業務課長）、2007年世界陸上大阪大会、2009年東京マラソン。1994年～1997年三越レディースカップゴルフトーナメント総合プロデューサー。2000年淡路花博、2002年うつくしま未来博、2005愛・地球博（愛知万博）等の各種イベントにおける公式グッズ等の独占販売を担当。

3. 大学体育指導者全国研修会報告

報告者：石手 靖・鳥海 崇

期 日：平成26年8月19日（火）～21日（木）

会 場：明治大学和泉キャンパス

（1）研修プログラム

【第1日目】

①特別講演

「スポーツ振興をめぐる最近の動向」

②研修Ⅰ

からだとの対話―「野口体操」を再考する

③研修Ⅱ

レクチャー&グループディスカッション
2020年に向けた教養体育

【第2日目】

3種目に分かれた実技指導研修

ゴルフ

ソフトボール

バドミントン

【第3日目】

3種目に分かれた実技指導研修

ゴルフ

ソフトボール

バドミントン

（2）研修内容

①特別講演

「スポーツ振興をめぐる最近の動向」

講 師：森岡裕策（文部科学省スポーツ・
青少年局 スポーツ振興課長）

平成23年に制定されたスポーツ基本法は、昭和36年のスポーツ振興法を50年ぶりに全部改正する形で制定された。本法律はスポーツに関する基本理念を定め、国及び地方公共団体の責務並びにスポーツ団体の努力を明らかにするとともに、スポーツに関する政策を総

合的かつ計画的に推進し、もって国民の心身の健全な発達、明るく豊かな国民生活の形成、活力ある社会の実現及び国際社会の調和ある発展位寄与することを目的としている。

平成24年に策定されたスポーツ基本計画は、スポーツ基本法に示された基本理念の実現に向け、平成24年度から10年間のスポーツ推進の基本方針と5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策が示されている。

平成25年に開催決定した東京オリンピック・パラリンピック競技大会は、2020年を日本にとっての新たな成長に向かうターゲット・イヤーと位置づけ、若者が夢と希望を持ち、日本社会の成長と世界の発展に貢献する社会と、官民の英知を集結し、レガシーを生み出す、新たな大会モデルの提案を目指す。さらに、今後、スポーツの価値や健全性を高めていくために、オール・ジャパン体制で取り組んでいく必要がある。

②研修 I

からだとの対話―「野口体操」を再考する
講 師：羽鳥 操（立教大学・明治大学非常勤講師／野口体操の会主宰）

野口体操とは、東京芸術大学名誉教授である野口三千三（1914～1998年）によって創始された、美術・音楽・演劇等の芸術化を中心に「力を抜く」という観点で動きを見直した一連の動作である。上体のぶらさげ、寝による、腕立てバウンドといった独特の動作や、マッサージ、からだほぐしといったリラクセスのための動作が含まれていた。ただし、参加者はその日の自分の体調を優先して、無理をしないように注意することが大切である。

③研修 II

レクチャー&グループディスカッション
2020年に向けた教養体育
レクチャー「新しい時代のオリンピズム、

そしてオリンピックレガシー」

講 師：和田浩一（フェリス女学院大学／NPO 法人日本オリンピック・アカデミー）

初代 IOC 会長であるクーベルタンの生涯を紹介し、その活動履歴や著作などから彼の思考とその変遷について確認した。また、同時期に IOC 委員として活躍した加納治五郎についても同様に確認することで、オリンピズム、オリンピックレガシーとは何かについての考察を行った。

グループディスカッション「2020年に向けて学生に何を伝えるか」

コーディネーター：後藤光将（明治大学／NPO 法人日本オリンピック・アカデミー）

参加者が8人ずつのグループに分かれ、以下の2つのテーマについて議論した。

1. 自分が実践している体育授業のセールスポイント、ウィークポイントはどこか。
2. 学生はどのような言葉でスポーツの価値を伝えてくれているのか。

それぞれのグループにおける議論を紙面にまとめ、最終日に参加者全員に配布された。

④ゴルフ

講 師：吉原 紳（聖マリアンナ医科大学／大学ゴルフ授業研究会）

講 師：高橋宗良（杏林大学／大学ゴルフ授業研究会）

講 師：北 徹朗（武蔵野美術大学／大学ゴルフ授業研究会）

ゴルフは各大学によって教育環境、教場環境が異なり、使用されている教具も様々である。また、他種目では見られない、簡易フィールドや練習場の利用のみでの授業展開も多く行われている。そこで本研修ではグラスファイバーを利用した教具制作や水道ホースとテ

ニスボールを利用した教具制作を体験するとともに、学内教場を活用した授業展開の方法について学習した。

報告者：永田直也・福士徳文

期 日：平成27年3月2日(月)～5日(木)

会 場：青森県青森市 八甲田山スキー場

(1) 研修プログラム

【第1日目】

- ①講 義
- ②実技研修 I
- ③講演 I

【第2日目】

- ①実技研修Ⅱ バックカントリーツアー
- ②実技研修Ⅲ バックカントリーツアー
- ③講演Ⅱ

【第3日目】

- ①実技研修Ⅳ バックカントリーツアー
- ②実技研修Ⅴ バックカントリーツアー
- ③ディスカッション

【第4日目】

実技研修Ⅵ

(2) 研修内容

①講 義

本セッションでは、実習に入る前に装備の点検と操作方法を学んだ。特にビーコンは、およそ半数の参加者が初めての使用となり、機器の原理から学ぶこととなった。

(記録者：永田)

②実技研修 I

バックカントリー装備品の使い方、雪崩捜索演習、積雪状態観察法

講 師：佐々木大輔(日本バックカント

リースキーガイド協会)

講 師：山内武巳(石巻専修大学)

実技研修 I では、積雪状態の確認方法やビーコンを用いた捜索法の実習を行った。

積雪状態の確認では、コンプレッションテストを用いて、積もった雪の中から雪崩の原因となる雪の確認を行った。非圧雪の斜面では、刻々と変化する天候によって雪が含む水分量が変わり、質の違った雪が何層にもわたって積もっていく。そのため、表面的には安全とされる雪質であっても1m下には雪崩の原因となる雪があり、体重を加えることにより雪崩が起きることがある。バックカントリーを行う際には、自身と同行者の安全を確保するために、丁寧な確認が必要なことを認識する実習となった。

遭難者の捜索では、雪崩に巻き込まれた遭難者がいる想定で、ビーコンを用いた捜索実習を行った。講義においてビーコンの原理を学んだことで、捜索の進め方を頭では理解していた。しかし、実際に雪面となると、遭難者のいる場所の深さ等多様な要因のために簡単には発見することができなかった。雪崩に巻き込まれることはない方が良いが、万が一の時のため、遭難者の捜索がどの程度難しいのか、どのような点に注意すべきかを事前に学んでおく必要があると感じた。

(記録者：永田)

③講演 I

「バックカントリーの魅力とリスクマネジメント」

講 師：佐々木大輔(日本バックカントリースキーガイド協会)

講演 I は、講義や実習で学んだ内容を元に、雪崩に巻き込まれないためにはどうしたら良いかという点について、雪崩が起きる原理、回避するための行動を学んだ。一見何で

もない雪面が、雪崩が起きる要因等を考慮して観察すると非常にリスクの高い雪面である場合もあり、バックカントリーに出る前には必ず理解すべき内容だと感じた。

また、講演後半では、佐々木講師が利尻の山を滑る様子などを視聴し、バックカントリーならではの自然の素晴らしさを感じることができた。(記録者：永田)

④講演Ⅱ

「八甲田の自然とバックカントリー用具の最新事情」

講師：浜部信彦(酸ヶ湯ガイド主任)

講演Ⅱでは、酸ヶ湯温泉のガイド主任である浜部講師から、八甲田とスキーの歴史について学んだ。八甲田山として有名な当地ではあるが、実際には八甲田山という山はなく、いくつかの山をまとめて八甲田山と呼んでいる。八甲田とスキーとの歴史は、明治時代に陸軍の行軍が遭難した後にノルウェーからスキー板が送られるなど、日本スキー発祥付近からの歴史を持っている。100歳までスキーをした三浦敬三氏が営林局員として観察(滑走)した山としても有名であり、バックカントリースキーだけでなく、日本スキーにおいても重要な場所であったことを学んだ。

(記録者：永田)

⑤実技研修Ⅱ

バックカントリーの基礎技術(班別ツアー)

講師：酸ヶ湯バックカントリースキーガイド

研修会で初回のツアーとなる今回は、ロープウェーで山頂に上がった後、班を二つに分けて実習がスタートした。バックカントリーツアー初体験の私は、オフピステを滑るだけで精一杯であり、シールやアルパイントレッカーを取り付けることや、ヒールフリー

の状態で行うことはなおさら困難であった。しかし、ガイドの方から滑り方や歩き方のコツを要所要所でアドバイスしていただき、少しずつオフピステの滑り方を身につけ、楽しさを実感できるようになってきた。さらにこの日は素晴らしい晴天に恵まれていたこともあり、自然の山々の景色を堪能することができた。これは、一般のスキー場では体験できないものであり、ありのままの自然を一望できることもバックカントリーの醍醐味の一つであると実感した。同時に、この実習が成り立っているのは、この山を知り尽くしたガイドの方に支えられていることや、前日の講習で学んだビーコンの使い方、雪崩のメカニズム等、安全に対する知識を身につけ、準備が整っていることが条件であると感じた。(記録者：福士)

⑥実技研修Ⅲ-Ⅵ

バックカントリーの応用技術(班別ツアー)

講師：酸ヶ湯バックカントリースキーガイド

実習Ⅲ以降では、これまでに学んだバックカントリーの基礎を踏まえて実習コースの変更を行い、多様な自然環境におけるツアーを実施した。実習Ⅳ以降では、「ガス」が出る天候となり前に進む同行者との距離を詰めなければならず、スタート・ストップに時間のかかるスノーボードにとっては非常に気を使うツアーとなった。しかし、突然現れる広大な滑走スペースや林間が、バックカントリーで滑る楽しさを高めてくれた。技術面においても、スノーボードで新雪をうまく滑走するためのポイントの指導があり、滑走技術の引出しを増やすことが出来た。バックカントリーというこれまで経験したことのない条件での滑走は、スノースポーツの楽しさを新たにし、参加者の「幅」を広げてくれる機会となった。(記録者：永田)

⑦ ディスカッション

ディスカッションでは、今回学んだことを元に、①現在行っているスノースポーツ授業の実施状況について、②現在行っているスノースポーツ授業の課題・悩みについて、③今回の研修会の内容を今後の授業にどのように活かそうか？の3点についてディスカッションした。

スノースポーツ授業は、各大学によってスキーのみ、スキーとスノーボードの選択、スキーとスノーボードの混合と形態が異なっていた。しかし、どのような形態であっても、雪の世界におけるスポーツの技術向上、マナーの理解や実践、雪ならではの危険を学ぶなどの点は変わらず、授業の根幹となるのは明らかである。ここ数年、何の知識や準備もないままバックカントリーへ行くスキーヤー・スノーボーダーが遭難する事故が、新聞等で大きく取り上げられている。安全かつ確かな技術を持ってスノースポーツを楽しむためにも、今回学んだバックカントリーにおける安全への知識は、学生へ還元する意義のある内容であろう。（記録者：永田）

4. 浅野・所内・学事・小泉基金報告書

①浅野均一記念研究奨励金

研究課題

足趾把持筋力と第5中足骨疲労骨折の関係の検討～シーズンの期分けに着目して～

研究代表者 福士徳文

補助額 250,000円

【目的】 人工芝グラウンドでのスポーツ活動の機会が増加したことで、傷害発生状況に変化がみられていることが問題視されている。そのため、これまでに人工芝そのものやシューズ等の道具の改良は進められてきたが、実際の身体づくりや動きづくりに関しては十分な検討が行われていない。そこで本研究では、人工芝上でのスポーツ活動における傷害発生予防を目的としたトレーニング立案に向けた調査の一貫として、足部を中心とした身体機能特性の調査を行うことを目的とする。傷害予防に重要な要素である足趾把持筋力を調査することは、比較的簡便に調査を行えることも鑑みると、選手や指導者にとって非常に有益な情報となり、今後の方向性を見出す上でも重要性が高いと言える。

【方法】 大学サッカー選手を対象に、足趾把持筋力（足指筋力測定器Ⅱ：竹井機器工業社製）、身体組成（InBody：バイオスペース社製、体組成計インナーキャン：タニタ社製）の測定を行った。足趾把持筋力測定は、母趾を中心に足趾を足趾把持バーにかけ、膝関節90°屈曲位、足関節底背屈0°、内外反0°となったことを験者が確認してから、左右3回ずつ測定した。身体組成測定は、測定を行う2時間前から飲食を禁止した。足趾把持筋力および身体組成測定は、オフシーズン（①7/30、⑥1/8、⑦2/3）、プレシーズン（②9/1）、インシーズン（③10/9、④11/6、⑤12/4）の各シーズン計7回の測定を行った。

【結果】 結果Ⅰ：非受傷群（23名46足）の

シーズンごとの体重比足趾把持筋力を比較したところ、②と④⑤⑥（②：0.39±0.07，④：0.42±0.07，⑤：0.44±0.07，⑥：0.44±0.07）、⑤と⑥の間で有意差がみられた（ $p < 0.05$ ）。結果Ⅱ：非受傷群と受傷群（3名3足）の体重比足趾把持筋力の比較をしたところ、統計的な有意差はみられなかったが、受傷群の筋力が低い傾向がみられた（非受傷群：0.42±0.07，受傷群：0.39±0.05， $p = 0.07$ ）。結果Ⅲ：受傷群の受傷足と非受傷足の体重比足趾把持筋力の比較では、受傷足の筋力が有意に低かった（受傷足：0.39±0.05，非受傷足：0.45±0.06， $p < 0.01$ ）。結果Ⅳ：非受傷群の体重比足趾把持筋力の右足・左足の比較では、どのシーズンにおいても有意差はみられなかった。

【考察】結果Ⅱは、藤高ら（2011）の研究を支持する結果となったが、結果Ⅰにおいてシーズン間での有意差がみられたため、受傷者の特徴を見出すためには引き続き定期的なデータを蓄積する必要があると考えられる。第5中足骨疲労骨折は再骨折のリスクが高い傷害であるため、結果Ⅲ・Ⅳでみられたような受傷足と非受傷足の筋力差は、手術後完治し現場復帰した状態であっても、トレーニングや十分なケアを行っていく必要がある。今後、測定期間中の公式戦出場時間別やInBodyデータとの関連、女子大学サッカー選手のデータ分析など、さらなる検討を加えていく予定である。

②所内個人研究費

研究課題

体育にICT教育を活用する試み3～映像と運動強度から運動動作を自己評価する方法～

研究代表者 山内 賢

補助額 259,150円

はじめに）スポーツにおける運動技術の学習場面では、運動経過を学習者が具体的にイメージするために、学習すべき運動を指導者

が口頭で説明する、もしくは、動画映像や連続写真などの視聴覚教材を用いた説明を行う方法が極めて一般である。後者については、PCの普及、動画圧縮、動画編集技術の進歩によって、繰り返し再生、スロー再生、コマ送り等の自在な提示が比較的簡便に実施できるようになり、映像情報の提供や提示方法の多様化が今後ますます進歩することが予想される。しかしながら、それらの映像情報を利用して学習者の観察能力向上を目指す映像活用方法に焦点をおいた研究は稀である。本研究は、有益な視覚情報入手後の映像学習・指導方法の意匠を探ることである。

目的）本研究の目的は、映像を介した自分自身の運動動作を初めて目にする学習者が、どのような映像情報を得れば、視覚を介して正確な動作のヒントを得ることができるか、そして、映像を観る時に起こり得る錯視をできるだけ抑えて、学習者がどこまで運動構造を理解できるかを明らかにすることである。

方法）本研究の被験者は5名の高齢者（平均年齢71.4歳±5.6）である。被験者は、ポールウォーキングを行い、その運動フォーム全体を撮影した映像のみから得られる映像情報と運動のカンやコツに類する詳細に見たい身体部位（腕）を撮影できるように、頭部に装着したアクティブカメラの映像から得られる運動構造を比較した。カメラはソニー社製（HDRAS100V）を用いた。調査する内容は、学習者の運動感覚や運動構造の理解度の一事例である。調査は、前もしくは横から身体全体を撮影した映像から観察できる腕とアクティブカメラで撮影した腕の動作の「見やすさ」を点数化するアンケート形式である。分析に関する質問項目は、「全体映像から観察できる腕振りテクニックのわかりやすさを点数化してください」、「腕の動きの映像から観察できる腕振りテクニックのわかりやすさを点数化してください」である。分析はt-検定を用いた。

結果) 今回の調査により、アクティブカメラを流用する運動観察は、ハンディカムカメラ汎用を主流として行われてきた映像学習・指導よりも「動作フォームを視覚的に確認しやすい」という事例的結果を得た ($p < 0.01$)。考察) 動作の質的様相を評価するためには、運動学的に自己分析するモルフォロギー的考察が効果的である。運動の協調性(うまさ)を導く運動構造とは、部分の動作が連動して滑らかな全身動作における精協調の完成に由来する。今回の結果は事例的であるが、学習者がもつ動作イメージと現実フォームの誤差を見つけやすくするためには、全体映像よりも身体の部分映像から得た視覚情報が有効であると考えられる。アクティブカメラによる部分的運動観察は、運動協調性の質を詳細に知ることができるので、ITCを活用した学習方法の斬新な意匠として提案する。

今後の研究内容) 今後は本研究の結果を基にして、アクティブカメラを活用したポールウォーキングの学習・指導における「動作矯正の度合い」および「運動負荷の比較」を調査して、運動強度の違いによるフォーム変化の分析を試みる。

発表 田村浩志、山内 賢：「負荷の軽いアクアフィットネス(水中運動)のビデオ指導教材の開発—ウェアラブルカメラを利用して—」, 第73回日本公衆衛生学会総会, 栃木県総合文化センター「(2014年11月)

研究課題

現代日本におけるスポーツ政策の動向：政策としてのスポーツ、政治課題としてのスポーツ

研究代表者 加藤大仁

補助額 234,380円

2013年9月にブエノスアイレスで開催されたIOC総会で、東京が2020年夏季オリンピックの開催地として選ばれた。オリンピック招致を巡る議論の過程では、交通網の整備

をはじめとする都市計画のあり方やカジノの合法化、外国人労働者の受け入れの是非等さまざまな意見が出されてきた。また、多くの事業が、2020年の「東京オリンピックまでに」を合言葉に進められていることを鑑みると、今後は2020年のオリンピックが平成という時代を語る際の目安になるのかもしれない。このようなインパクトの大きさこそ、政治学や経済学、社会学をはじめ、様々な領域の研究者が、オリンピックに知的関心を寄せてきたゆえんであろう。

尤も、スポーツが我が国における政治学や政策学で主要な対象として捉えられてきたとは言い難く、国政の場でもスポーツを政治課題として捉える政治家は殆どいなかったというのが実情であろう。しかし、2000年代半ば以降俄かにスポーツ立国論が唱えられ、2011年にはスポーツ基本法が制定されるなど、近年スポーツをめぐる議論が盛んになってきたことも事実である。そこで、本研究では近年のスポーツ政策分野における政策過程を概観し、なにゆえ今日スポーツが政策課題とされるのかを探ることを主たる課題とした。

2011年5月には1961年に制定されたスポーツ振興法を全部改正するという形でスポーツ基本法が制定され、「スポーツ立国の実現」を目指すことが謳われると共に、トップアスリートの競技力向上、国際競技大会招致・開催に関し、国が支援することが義務付けられた。スポーツ基本法制定に向けた直接の契機となったのは、第1次安倍政権下でスポーツ立国に関する議論が始められたことであるが、東京都によるオリンピック招致を背景に、スポーツ基本法という形に収斂していったと見るのが妥当であろう。

東京都がオリンピック招致を目指した背景には、国際都市として競争力強化や、バブルの崩壊により頓挫した臨海地区開発といった目論見があったことが見て取れる。また、国

としてもオリンピックのようなビッグイベントがなければ、多額の費用を要する公共事業等、思い切った政策を打ち出しにくい情勢にあったという事情もある。つまり、オリンピックを奇貨として、都市の再生や経済停滞からの脱却が目論まれたという側面が見て取れるのである。

発表 加藤大仁 (2014) 手段としてのスポーツ、目的としてのスポーツ：近年のスポーツ政策に関する一考察. 海外外事情 (拓殖大学海外事情研究所紀要) 62 (11)

研究課題

ボールゲームにおけるゲーム分析を用いた実践的研究

研究代表者 鳥海 崇

補助額 259,800円

慶應義塾体育会には41の部活動があり、それぞれが早慶戦を実施している。その数は、春秋、部門別、男女別等も含めると年間63試合になる。2014年度の成績は18勝42敗3分であり、勝率はちょうど3割となる。そのうち僅差と呼べる試合は約3割の20試合にも上り、毎回非常に白熱した試合が展開されるとともに、あと1点を埋めるための科学アプローチの必要性が感じられている。

これまで発表者および、基盤研究2班においてはこの1点を埋めるための科学アプローチとして以下の3点について調査研究を行ってきた。

1. ボールゲームにおけるゲーム分析を用いた実践的研究
2. 体力及び体組成測定を用いたタレント識別に関する研究
3. マウスガードを用いたパフォーマンス変化についての実践的研究

本発表では上記1. についてのこれまでの研究結果について報告した。

2014年のシーズンにおいて、ゲーム分析ソ

フトおよび分析シートが競技成績に与える影響を、水泳部水球部門を対象に試験的調査を実施した。ゲーム分析ソフトとしては、GameBreaker (Sportstec 社) を用いた。このソフトは、試合中の選手のプレイ内容 (シュート、ファウル等) をパソコン上で入力し、試合後に選手が選択したプレイの映像を抽出してダイジェスト映像を生成することができる。これにより従来の早送りや巻き戻しで見たいシーンを探し出す必要がなく、格段の効果が期待できる。

また、ゲーム分析サポートの運用方法については以下の通りとした。従来のゲーム分析が、試合の動画は youtube に投稿し、部員であれば誰でも視聴可能な状態とすること、及び、リーグ戦の翌日と次のリーグ戦の前日に試合の動画を通して視聴して意見交換すること、としていた。そこで本研究でのゲーム分析は専属アナリストを導入し、水泳連盟で作成している分析シートを毎試合作成すること、及び Gamebreaker を導入し、監督・コーチ・選手から出る要望に従った編集映像を作成し、youtube に投稿、部員であれば誰でも視聴可能な状態とすること、そしてリーグ戦の翌日と次のリーグ戦の前日に、分析シートと共に試合の動画と編集映像を視聴して意見交換することとした。

結果として競技成績に大きな影響を与えることはなかったが、選手らからの聞き取り調査からは分析ソフトおよびシートに対して高評価が得られた。ただし、指導者からは分析シートに対しては高評価が得られた一方、分析ソフトに対しては負の評価が得られた。分析ソフトを使用し、競技成績にいい影響を与えるためには、それを使いこなすことができる常任の指導者及び分析官が必要であると考えられる。もしくは、簡便な活用方法としては、講習会等を実施し、ゲーム分析に対する知識を与え、安価に活用できる動画編集ソフトを紹介することで、大事な時期のみゲーム

分析を実施し、負担少なく競技力向上を目指すことができると考えられる。

③学事振興資金

研究課題

体育にICT教育を導入する試み～シリアスゲームを用いた運動処方と体力測定の開発～
研究代表者 山内 賢

補助額 200,000円

運動不足病は、世界的な流行の兆候である。健康を手軽に管理できるアプリケーションソフト（AP）が近年続々登場しており、このようなソフト開発は、健康づくりの気運を高め、健康寿命延伸に欠かせない健康の自己評価・責任・管理による、不健康の早期発見と予防に寄与する可能性がある。特に運動に関連するものは、APと並行して家庭用ゲーム機として市場に出回り、運動開始や継続の動機づけ、メタボリックシンドローム、体型管理等に貢献することが健康関連の学会で発表され、そして普及している。そこで研究者は、体育・スポーツ・健康教育に家庭用ゲームを改良した体力測定環境を意匠することを試みた。本研究の目的は、家庭用ゲームを流用したセルフ方式で行う体力測定の意匠、および健康を重要視した運動指導にICT教育を導入するイノベーションを提案することである。この研究は開発に主眼を置いているものであり、研究者は以下の成果を実現した。

①『体力測定にゲーム的な楽しさを導入すれば、体力観察に関する興味が高揚する』という仮説を立て、家庭用ゲーム機に付属するハッキング可能な健康に関連したソフトをノートパソコン（PC）にビルトインした。

②運動をテーマにした健康志向の家庭用ゲーム機の殆どは、身体重活動内容のモニタリングを可能とするブルートゥース（Bluetooth）機能を搭載しているので、データをデジタル化してPCに転送することが可能となり、汎用されているRGBと赤外線カ

メラ内臓のセンサによる映像認識、および重心動揺計測可能な家庭用ゲームや活動量計の無線を感知する専用ソフトの設計をした。

③一般的に高価な体力測定機器は、大掛かりで「計測者が測定室に行く」という煩わしさがあり、測定を躊躇するというハードルが存在するが、一方体力測定用に改良したソフトをインストールしたPC、センサおよび家庭用ゲーム機は、持ち運びが容易であり、体力テストを身近なものにする可能性が期待できる。

研究課題

現代日本における政治的潮流の変化とスポーツ政策の動向

研究代表者 加藤大仁

補助額 234,380円

2011年5月31日に8会派による共同提案として衆議院に提出されたスポーツ基本法案は、6月9日の衆議院、17日の参議院ともに全会一致で可決され、成立した。スポーツ基本法には前文が置かれ、前文冒頭で「スポーツは世界共通の人類の文化である」と謳い、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人の権利」であるとして「スポーツ権」について明記されている。また、国の責務としてスポーツを振興し、「スポーツ立国の実現」を目指すとし、トップアスリートの競技力向上、国際競技大会招致・開催に国の支援義務を課している。

そこで、本研究では、東京都によるオリンピック招致活動やスポーツ立国を巡る議論がスポーツ政策に転機をもたらしたことを示すとともに、スポーツ権やスポーツ政策の学問的根拠について概観し、今日のスポーツ政策が抱える問題点—とりわけ一般国民の「スポーツ権」確保という観点から見た場合の問題点—を明らかにすることを目的とした。

一般に基本法とは、国政上重要な政策分野の基本方針などを明示したもので、憲法

の理念を具体化する役割を果たすものと考えられている。あくまで抽象的な形ではあるが、スポーツ基本法では「スポーツ権」について明記されており、スポーツ権が新しい人権の1つとして位置づけられたと考えられなくもない。その一方で、「スポーツ権」という言葉が意味する具体的な意味内容が明らかにされたわけではないし、「スポーツ権」に関する規程が、直ちに裁判規範として機能する訳ではない。「スポーツ権」が中身のあるものになるか否かは、今後の施策に委ねられている。

ところで、2001年に誕生した小泉政権の下では、いわゆる新自由主義路線の下、小さな政府が志向された。一方、スポーツ基本法では、国がスポーツという領域にも積極的に関わる姿勢が明確に打ち出されている。2002年の骨太の方針では、健康やスポーツ分野の産業化が謳われていたことを考えると、小泉政権以降、何らかの形でスポーツ政策の分野に変更を促すような変化があったと考えるのが自然だろう。事実、2006年3月には東京都がオリンピック開催招致を表明し、同年9月には安倍政権発足に伴い任命された遠藤文部科学副大臣を中心に、スポーツを国の政策課題の1つとして考え、積極的な政策を打ち出していこうという動きが表面化していった。

では、スポーツを公共政策の対象とする学問的根拠は、どのような点に求められるだろうか。経済学の概念を用いて考察すると、スポーツ関連の財やサービスは公共財としての基準を満たしていない。その一方で、スポーツがもたらす正の外部効果を考えると、スポーツ振興に補助金を出すなどして、社会的便益を増大させることは、国や地方公共団体にとって合理的な行動となる。考えようによっては、スポーツをメリット財として捉えることも可能だろう。しかし、スポーツの外部効果を測定することは、かなりの難問であ

る。社会的価値の観点から公的に供給することが正当化されるメリット財に至っては、政治的な決定以外、その供給量を定める方法はない。

現在では人々の考え方も経済至上主義から、健康で文化的な生活を求める方向に変わってきている。従って、スポーツ環境の整備などは、多くの人々からの支持を得られると考えられる。現在、ようやく政治の世界でもスポーツが政策の対象として認識されるようになってきたのである。スポーツ基本法にスポーツ権が明記されたことなどを併せて考えると、今はスポーツの公共性が形成されつつある段階にあると位置づけることも可能であろう。その一方で、本来政策目的であるスポーツが、政策手段に墮してしまわないよう、今後の施策の動向を注視する必要がある。

発表 加藤大仁 (2015) 権利としてのスポーツ、政策としてのスポーツ. 慶應大学体育研究所紀要 54 (1)

④小泉基金国外出張補助

研究代表者 石手 靖

研究協力者 鳥海 崇 体育研究所・専任講師、藤本秀樹 幼稚舎・教諭

補助額 268,000円

平成26年2月28日から3月11日まで2つの国際学会において研究発表した。

1つ目は3月1日から5日にかけてマルタ共和国のマルタにおいて実施された国際文理学会 (International Journal of arts and science) にて、「Study of the assessment of body composition in Japanese college athletes」という題目で発表した。研究内容としては本塾体育会に所属する水泳部員の体組成を測定し、水泳競技間 (水球、競泳、飛込) における体組成の違いを議論する、というものであった。それぞれの運動の特徴とし

ては競技時間（水球は約1時間、競泳は数分、飛込は約1秒）や動作方法（水球は左右非対称の球技、競泳は左右対称の繰り返し運動、飛込は回転動作）などが挙げられる。測定は生体電気インピーダンス法を用いた。これは全身に様々な周波数の電流を流し、その抵抗値を測定することで身体各所の脂肪量と骨格筋量とを測定する手法である。結果としては水球競技の上肢及び体幹が競泳や飛込と比較して有意に筋肉量が多く、下肢に関してはどの競技間にも有意な差は生じていなかった。また、どの競技においても左右差に有意な差は生じていなかった。

2つ目は3月8日から10日にかけてアラブ首長国連邦のドバイにおいて実施された国際教育学会（The IAFOR International Conference on Education- Dubai）にて、「Talent Identification for College Athletes by Using their Body Composition」という題目で発表した。これは先のマルタの学会の内容を発展したもので、大学生に対するタレント識別手法の確立を目的として、本塾体育会に所属する6つの部（水球、競泳、剣道、庭球、準硬式野球、サッカー）の部員の体組成を測定し、その競技毎の体組成の違いを議論する、というものである。手法は同じく生体電気インピーダンス法を用いた。結果としてはマルタの学会と同様に水球は上肢及び体幹が他の競技と比較して有意に高い値を示し、下肢においては剣道と庭球が高値を示した。また、サッカーは上肢が他の競技よりも低値を示した。

発表 石手靖、鳥海崇、藤本秀樹：Study of the assessment of body composition in Japanese college athletes.

石手靖、鳥海崇：Talent Identification for College Athletes by Using their Body Composition.

研究代表者 村山光義

研究協力者 内山孝憲 理工学部・物理情報工学科・教授、永岡学 理工学部・理工学研究科・院生、米田継武 順天堂大学・名誉教授

補助額 240,000円

【目的】 筋硬度評価は筋コンディショニング指標として活用が期待され簡便な押圧型筋硬度計が開発されている。しかし、簡便装置は測定感度等に疑問もある。本研究は押圧型筋硬度計測において大型装置と簡便装置を比較し、その特徴・制約・装置間の対応関係等を再検討するため、生体模擬物質を用いたモデル実験を行った。

【方法】 筋硬度計：大型装置としてTK-HS100（特殊計測）を可動ステージで制御する筆者らの計測システム(TK)と簡便型のPEK-1（井元製作所：PK）、NEUTONE TDM-Z1（トライオール：NT）、デジタル筋肉硬度計 M123KNT-5（シロ産業：MK）を用いた。生体を模倣した硬さファントム（OST社製 Y15, Y30, Y50）に皮革等を重ね、生体の層構造を設定し硬度計測を行った。

【結果と考察】 皮革のない Y15 + Y30、Y15 + Y50 の条件において、TK からの硬度計算は下層の Y30, Y50 に近似した値が得られた。また、この際の変位 - 力関係は 2 層弾性モデル (Horikawa et al.) に一致し線形を示した。一方、簡便型の 3 装置の内、MK は比較的推定精度が高かったが、PK、NT は感度が低く硬度を検出できないケースもあった。このことは、Y15 のファントムが実際の生体計測よりもかなりやわらかいことに起因すると考えられた。続いて、ファントムに皮革を重ねると硬度が急激に増加しかつ押圧応答が非線形になった。Y15 を皮下組織と見なし皮革と Y30 (Y50) の間に重ねた場合、PK、MK では Y15 + Y30 でも上層の Y15 の硬度に近かった。一方 TK による下層硬度は過大評価となった。このことは、少なくとも皮膚・皮下組織が下層

の筋硬度計測値に影響し、押圧量が小さい場合は上層組織の硬度が支配的となると考えられた。つまり、簡便装置の筋硬度計測の信頼性には疑問が残る。簡便装置は下層の硬度が高い方が高感度となり、変形しにくく骨までの距離が短い等の筋に適用できる可能性があるが、皮下組織量や部位の大きさなどを考慮し、慎重に取り扱う必要があると考えられた。

発表 第19回ヨーロッパスポーツ科学会議
2014.7.2-5 アムステルダム
Murayama M, Nagaoka M, Uchiyama T, Yoneda T, HARDNESS COMPARISON OF TISSUE-MIMICKING MATERIALS MEASURED USING DIFFERENT TYPES OF MUSCLE-HARDNESS METERS, 19th Annual congress of the European College of Sport Science, Book of abstracts 250

研究代表者 鳥海 崇
研究協力者 石手 靖 体育研究所・教授、
藤本秀樹 幼稚舎・教諭
補助額 268,000円

平成26年2月28日から3月11日まで2つの国際学会において研究発表した。

1つ目は3月1日から5日にかけてマルタ共和国のマルタにおいて実施された国際文理学会 (International Journal of arts and science) にて、「Study of the assessment of body composition in Japanese college athletes」という題目で発表した。研究内容としては本塾体育会に所属する水泳部員の体組成を測定し、水泳競技間 (水球、競泳、飛込) における体組成の違いを議論する、というものであった。それぞれの運動の特徴としては競技時間 (水球は約1時間、競泳は数分、飛込は約1秒) や動作方法 (水球は左右非対称の球技、競泳は左右対称の繰り返し運動、飛込は回転動作) などが挙げられる。測定は生体電気インピーダンス法を用いた。これは

全身に様々な周波数の電流を流し、その抵抗値を測定することで身体各所の脂肪量と骨格筋量とを測定する手法である。結果としては水球競技の上肢及び体幹が競泳や飛込と比較して有意に筋肉量が多く、下肢に関してはどの競技間にも有意な差は生じていなかった。また、どの競技においても左右差に有意な差は生じていなかった。

2つ目は3月8日から10日にかけてアラブ首長国連邦のドバイにおいて実施された国際教育学会 (The IAFOR International Conference on Education- Dubai) にて、「Talent Identification for College Athletes by Using their Body Composition」という題目で発表した。これは先のマルタの学会の内容を発展したもので、大学生に対するタレント識別手法の確立を目的として、本塾体育会に所属する6つの部 (水球、競泳、剣道、庭球、準硬式野球、サッカー) の部員の体組成を測定し、その競技毎の体組成の違いを議論する、というものである。手法は同じく生体電気インピーダンス法を用いた。結果としてはマルタの学会と同様に水球は上肢及び体幹が他の競技と比較して有意に高い値を示し、下肢においては剣道と庭球が高値を示した。また、サッカーは上肢が他の競技よりも低値を示した。

発表 鳥海崇、石手靖、藤本秀樹：Study of the assessment of body composition in Japanese college athletes.

鳥海崇、石手靖：Talent Identification for College Athletes by Using their Body Composition.

Ⅲ. 教育活動記録

(教育委員会)

Ⅲ－１．授業の実施

１．平成26年度体育科目の履修者統計

本年度は、昨年度に引き続いて体育科目を広報するパンフレットやホームページを活用し、体育科目情報の視覚的なアピールを行った。履修者の集計の結果、体育科目全体の履修者数は7367名（前年比+324名）となり、前年に引き続き履修者増となった。以下に詳細な履修者統計を示し、本年度教育活動の報告と次年度に向けた課題を挙げる。

１）体育学講義と体育学演習

平成26年度は、体育学講義10コマ（前年比+1）、体育学演習1コマ（同比-1）を開講した。体育学講義のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-1に、体育学演習のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-2に示す。本年度は、昨年度に引き続き設置授業数・設置曜日・時限の見直しを実施した。また、新たな体育講義としてブラインドサッカー論を加え、障がい者スポーツの視点からスポーツを取り巻く社会とその多様性を学ぶなど魅力ある講義科目の充実を図った。履修者数の合計は、体育学講義で136名（前年比+16.9%）、体育学演習

で6名（同比-66.6%）であった。1コマあたりの履修者数は、体育学講義では15.9名（前年比+5.3%）と、1コマあたりの増減は少ない結果が示された。2020年までは、東京オリンピック・パラリンピックに向けて「する」だけでなく「見る」、「支える」などのスポーツとの関わり方を塾生に伝えることができる良い機会である。次年度も魅力的な講義内容をそろえ、塾生に多様な体育・スポーツを伝えられるよう準備していく。

２）体育実技 A・B

表Ⅲ-1-3に体育実技 A（ウィークリースポーツクラス）の担当者とそれぞれの担当種目、表Ⅲ-1-4に体育実技 A（ウィークリースポーツクラス）の種目別履修状況を示す。表Ⅲ-1-4に示すように、日吉・三田・芝共立合計で7611名の申込（前年比+4.4%）に対し、最終的に6811名の履修者（同比+2.9%）となった。定員に対する充足率は、全体で86%となり、前年を2%程上回った。また、三田・芝共立キャンパス設置科目は、合わせた充足率が76.8%となった（三田：前年比+12%、芝共立：同比+5%）。前年に引き続き履修者が増加した背景には、健康志向や東

表Ⅲ-1-1. 平成26年度
体育学講義のタイトル及び担当者

講義名	コマ数			履修者数
	春	秋	計	
スポーツの効用を科学的にみる (スポーツ総論)	1		1	15
スポーツ心理学の世界	1		1	73
スポーツと身体(からだ)の基礎理論	1		1	42
スポーツコーチング概論	1		1	14
ブラインドサッカー論	1			20
スポーツの技と文化を探る		1	1	11
健康と運動の科学		1	1	7
現代社会とスポーツ		1	1	6
チームスポーツコーチング		1	1	10
スポーツ現場のコーチングと安全教育		1	1	14

表Ⅲ-1-2. 平成26年度
体育学演習のタイトル及び担当者

講義名	コマ数			履修者数
	春	秋	計	
ベーシックライフサポート (救急法の基礎)	1		1	6

京オリンピック・パラリンピックを控えた近年の体育・スポーツに対する興味の増加と、ホームページやパンフレットを利用した広報活動が影響したと考えられる。様々な要因により体育実技の履修者が増加したことは、体育・スポーツを用いて塾生を教育する体育研

究所とすれば、多くの塾生にその教育機会が広がったことは良いことである。しかし、高い充足率となったことで現状のコマ数では、次年度以降の更なる履修者の増加は見込めない。次年度は、本年度の履修者動向の詳細を把握し、コマ数の増加を企画していきたい。

表Ⅲ-1-3. 平成26年度 体育実技 A・B（ウィークリースポーツクラス）担当者及び担当種目

	担当者	種目
教 授	近藤 明彦	ウォーキングエクササイズ, ジョギング, 陸上競技, フィットネストレーニング
〃	佐々木 玲子	エアロビクス
〃	植田 史生	剣道
〃	綿田 博人	野球, ゴルフ
〃	石手 靖	バレーボール
〃	村山 光義	フライングディスク, ニュースポーツ, インドアスポーツ
准 教 授	山内 賢	ハンドボール, フィットネストレーニング
〃	吉田 泰将	剣道, ソフトボール
〃	加藤 大仁	バスケットボール
〃	板垣 悦子	ボディメイク・エクササイズ, ボディコンディショニング(ヨガ&ピラティス), 卓球
〃	加藤 幸司	バドミントン
〃	須田 芳正	サッカー, フットサル
〃	野口 和行	バレーボール, ニュースポーツ
〃	村松 憲	テニス
専 任 講 師	鳥海 崇	水泳, 水球
〃	奥山 静代	エアロビクス, バレーボール, ボディメイクエクササイズ
〃	坂井 利彰	テニス
助教(有期)	永田 直也	バスケットボール
〃	福士 徳文	サッカー, フットサル
非常勤講師	赤井 宏司	ソフトテニス
〃	朝飛 大	柔道
〃	池田 知弘	自動車
〃	石渡 千草	ソフトボール
〃	岩崎 陸	フットサル
〃	岡田 雅俊	軟式野球
〃	小澤 宏幸	テニス

表Ⅲ-1-5に体育実技A・B（シーズンスポーツクラス）の各種目の担当者及び履修状況を示す。平成26年度は9種目(前年比同数)を開講した。履修者数は256名（前年比+32.0%）で、充足率は88%（同比+21%）になった。昨年度に比べて大幅な履修者増加となっ

たが、シーズンスポーツは年度によって履修者の増減が大きく、安定した充足率を得られていない。この点については、継続的な広報活動と、魅力ある授業内容の再検討を図り、安定した多数の履修者を獲得していきたい。

	担当者	種 目
非常勤講師	折笠 愛	バレーボール
〃	勝又 正浩	ゴルフ
〃	金指みの利	バレエエクササイズ
〃	木塚 孝幸	バスケットボール
〃	木林 弥生	卓球
〃	久保田正美	空手
〃	河乃 建仁	気功
〃	齋藤百合子	バスケット
〃	酒井 絵梨	テニス
〃	佐藤 達也	アーチェリー
〃	島田桂太郎	ボクシング
〃	杉本 亮子	ボディコンディショニング（ヨガ&ピラティス）
〃	鷺見 全弘	水泳
〃	竹村りょうこ	テニス
〃	田中 雅子	エアロビクス
〃	田中由美子	フェンシング
〃	円谷 洋一	弓術
〃	寺田 好秀	テニス
〃	藤平 信一	合気道
〃	富田 賢	サッカー
〃	原 莊太郎	テニス
〃	原 怜来	水泳
〃	平野 泰宏	バドミントン
〃	弘 卓三	フィットネストレーニング
〃	溝口絵里加	フィットネストレーニング
〃	宮本 千晶	テニス
〃	矢作 拓也	バレーボール

表Ⅲ-1-4. 平成26年度 体育実技 A・B (ウィークリースポーツクラス) 種目別履修状況

地区	科目名	定員	登録数	倍率	最終履修者数	充足率
日吉地区開設	アーチェリー	88	134	1.52	86	98%
	ウォーキングエクササイズ	120	34	0.28	42	35%
	エアロビクス	320	304	0.95	307	96%
	ゴルフ	256	313	1.22	254	99%
	サッカー	450	369	0.82	394	88%
	ジョギング	30	8	0.27	11	37%
	ソフトテニス	40	34	0.85	35	88%
	ソフトボール	192	134	0.70	170	89%
	ボディコンディショニング(ヨガ&ピラティス)	200	444	2.22	250	125%
	ボディメイクエクササイズ	40	33	0.83	39	98%
	テニス	800	829	1.04	774	97%
	水泳	320	231	0.72	259	81%
	水球	80	24	0.30	29	36%
	ニュースポーツ	100	50	0.50	71	71%
	バスケットボール	660	713	1.08	614	93%
	バドミントン	396	662	1.67	416	105%
	バレエエクササイズ	80	106	1.33	81	101%
	バレーボール	592	505	0.85	462	78%
	ハンドボール	120	66	0.55	87	73%
	フィットネストレーニング	440	348	0.79	380	86%
	フェンシング	44	31	0.70	33	75%
	フットサル	450	467	1.04	421	94%
	フライングディスク	50	59	1.18	60	120%
	ボクシング	160	100	0.63	113	71%
	剣道	200	89	0.45	95	48%
	合気道	60	45	0.75	52	87%
	自動車	120	244	2.03	119	99%
	柔道	120	34	0.28	38	32%
	空手	56	30	0.54	32	57%
	卓球	336	309	0.92	339	101%
	野球	120	60	0.50	74	62%
	軟式野球	60	66	1.10	61	102%
陸上競技	20	5	0.25	6	30%	
気功	120	134	1.12	109	91%	
	日吉合計	7240	7014	0.97	6313	87%
三田地区開設	テニス	196	213	1.09	184	94%
	バレーボール	100	56	0.56	57	57%
	弓術	100	133	1.33	86	86%
	剣道	80	18	0.23	18	23%
	合気道	60	83	1.38	59	98%
	三田合計	536	503	0.94	404	75%
芝地区開設	ボディメイクエクササイズ	40	33	0.83	33	83%
	インドアスポーツ	80	61	0.76	61	76%
	芝共立合計	120	94	0.78	94	78%
	全体合計	7896	7611	0.96	6811	86%

表Ⅲ-1-5. 平成26年度 体育実技 A・B (シーズンスポーツクラス) 担当者及び履修状況

	月	科目名	担当者	定員	登録数	倍率	最終履修者数	充足率
春学期	8月	弓術	高橋 道雄	40	46	1.15	40	100%
		マリンスポーツアクティビティ	鷺見 全弘	25	25	1.00	25	100%
		馬術 (B)	高見 幸生	32	48	1.50	30	94%
		山岳「Nature & Trail」(B)	丸 誠一郎	20	27	1.35	27	135%
		ヨット (B)	金子 隆司	25	14	0.56	22	88%
		ビーチバレー (B)	石手 靖	30	22	0.73	28	93%
秋学期	9月	アウトドアレクリエーション(B)	野口 和行	50	38	0.76	49	98%
	2月	スキー (B)	吉田 久男	120	59	0.49	67	56%
		スケート (B)	小山 正	40	50	1.25	50	125%
計				382	329	0.86	338	88%

2. 授業評価の実施

体育研究所では、体育実技を履修した学生による授業評価を長年継続的に実施し、より適切な授業展開のための基礎資料を得て、授業改善に取り組んでいる。専任教員に加え、非常勤講師（ウィークリースポーツ）においても平成23年度秋学期より web 方式によるアンケートの回収を継続している。

実施に際してはこれまでと同様に、授業終了2週間前より入力可能として、回答人数を把握することにより、未実施者に対しては残りの授業で実施を促した。

以下、集計を行った。表Ⅲ-1-6はアンケート回答者数、表Ⅲ-1-7, 8にはアンケート調査用紙の質問項目を示した。アンケートの各質問項目には「強くそう思う」(5点)、「そう思う」(4点)、「どちらとも言えない」(3点)、「そうは思わない」(2点)、「全くそう思わない」(1点)の5段階で回答させ、得点化して評価した。Web方式によるアンケートでは、回答の時間に制限がないため、自由

記述に意見を書きやすいというメリットがあるが、回答率は紙面方式より低下しているのが現状である。引き続き、各教員が積極的にアンケートへの回答を促す努力を続けなければならない。

表Ⅲ-1-6. アンケート回答者数

	アンケート総数
春学期ウィークリー	1782
秋学期ウィークリー	838
春学期講義・演習	108
秋学期講義・演習	12
シーズン	120

表Ⅲ-1-7. 授業評価アンケート質問項目（講義・演習・実技）

履修者全員（講義・演習・実技）回答	
設問1	曜日時限を選択してください
設問2	実施地区を選択してください
設問3	自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した
設問4	教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した
設問5	教員の指導・教授方法は適切であった
設問6	教員はこの授業についての十分な知識を持っていた
設問7	教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した
設問8	教員の話し方は聞き取りやすかった
設問9	この授業は塾生にとってふさわしいものだった
設問10	この授業は自分にとって満足出来るものであった
設問11	この授業によって知識を深めることができた
設問12	この授業の目的・ねらいを十分理解できた
設問13	この授業の内容は興味のあるものだった
設問14	このクラスの雰囲気は良好であった
設問15	自分はこの授業に意欲的に取り組んだ
実技履修者のみ回答	
設問16	この授業は健康や体力の向上に役立った
設問17	この授業によって運動技術が向上した
設問18	運動量は適切であった
講義・演習履修者のみ回答	
設問19	配布資料やプレゼンテーションが適切であった
自由記述	
設問20	この授業を履修した理由・動機について記入してください
設問21	授業内容について記入してください（良かった事）
設問22	授業内容について記入してください（改善を要求することなど）
設問23	担当教員について記入してください（良かった事）
設問24	担当教員について記入してください（改善を要求することなど）
設問25	施設および機器・用具等について記入してください（良かった事）
設問26	施設および機器・用具等について記入してください（改善を要求することなど）
設問27	体育科目全般に関する意見および提案について記入してください

表Ⅲ-1-8. 授業評価アンケート質問項目（シーズンスポーツ）

選択肢からの回答	
設問1	自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した
設問2	教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した
設問3	教員の指導・教授方法は適切であった
設問4	教員はこの授業についての十分な知識を持っていた
設問5	教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した
設問6	教員の話し方は聞き取りやすかった
設問7	この授業は塾生にとってふさわしいものだった
設問8	この授業は自分にとって満足出来るものであった
設問9	この授業によって知識を深めることができた
設問10	この授業の目的・ねらいを十分理解できた
設問11	この授業の内容は興味のあるものだった
設問12	このクラスの雰囲気は良好であった
設問13	自分はこの授業に意欲的に取り組んだ
設問14	この授業は健康や体力の向上に役立った
設問15	この授業によって運動技術が向上した
設問16	運動量は適切であった
自由記述	
設問17	この授業を履修した理由・動機について記入してください
設問18	授業内容について記入してください（良かった事）
設問19	授業内容について記入してください（改善を要求することなど）
設問20	担当教員について記入してください（良かった事）
設問21	担当教員について記入してください（改善を要求することなど）
設問22	施設および機器・用具等について記入してください（良かった事）
設問23	施設および機器・用具等について記入してください（改善を要求することなど）
設問24	体育科目全般に関する意見および提案について記入してください

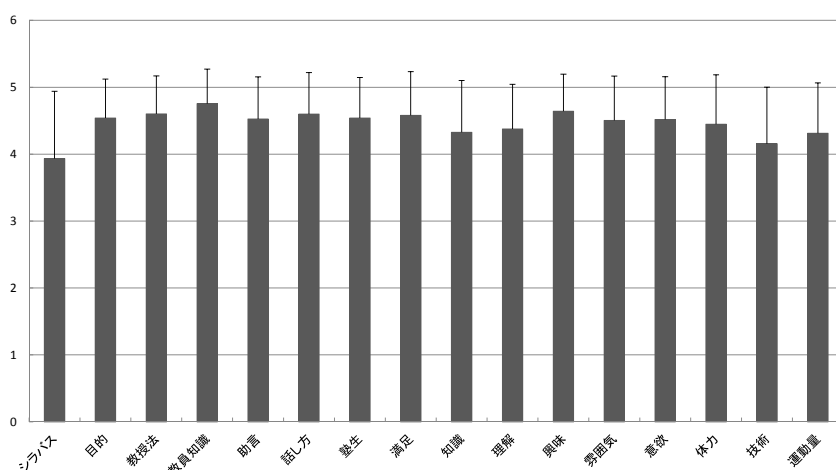
1) 体育実技ウィークリー種目の授業評価

体育実技ウィークリー種目における質問項目別5段階評価（平均値±標準偏差）を図Ⅲ-1-1（春学期）、図Ⅲ-1-2（秋学期）に示した。結果をみるとほぼ例年と同様の傾向であり、以下のようにまとめられる。

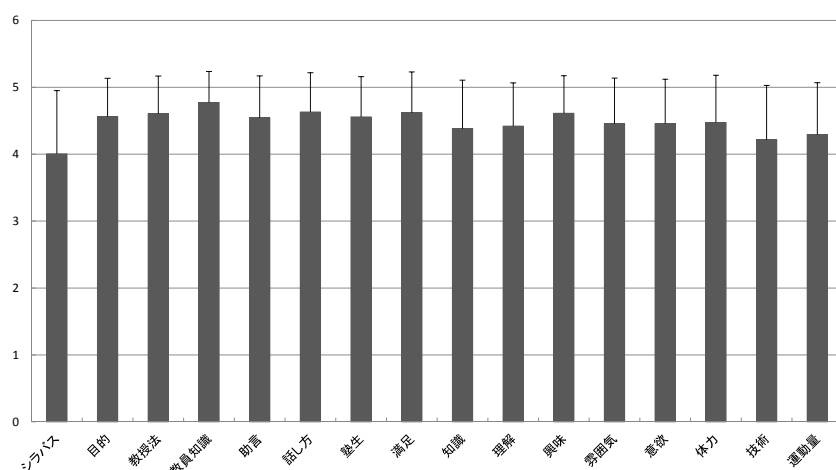
春・秋の学期間に差はほとんどなく、同じ傾向が得られている。全般に4点以上の肯定的評価がほとんどであった。平均値で最も高い評価となったものは、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」（春：4.8±0.5, 秋：4.8±0.5）であり、「教員の指導・教授方法は適切であった」、「教員の話し方は聞き取りやすかった」等教員に対する評価に加え、「満足度」も高い値を示した。

一方、最も平均点が低いものは「自分はシラバスの内容に関心を持ち、この授業を履修した」であった（春：3.9±1.0, 秋：4.0±0.9）。このことは、曜日や時限による制約から単に時間割を埋めるために履修していたり、第1希望の種目に抽選漏れした学生が他の種目を履修していたりすることが考えられる。

表Ⅲ-1-9, 10には春学期・秋学期の種目別の5段階評価を示した。その結果「運動技術の向上」、などが低い値を示し、気功などが3点台であった。種目の違いにより技術向上の難易度は異なるため、そのことを教員が理解させながら履修者に伝える必要があると考えられる。



図Ⅲ-1-1. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期ウィークリー全体平均）

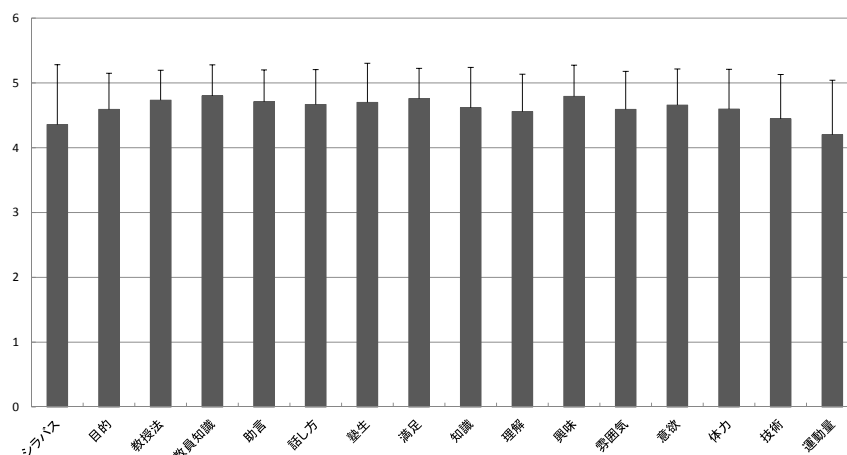


図Ⅲ-1-2. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期ウィークリー全体平均）

2) シーズンスポーツ種目の授業評価

シーズンスポーツ種目における5段階評価(平均値±標準偏差)を図Ⅲ-1-3に、また種目別の5段階評価を表Ⅲ-1-11に示した。すべての項目とも平均値で4点をこえる肯定的評価が得られている。特に「教員はこの授

業についての十分な知識を持っていた」「この授業は自分にとって満足出来るものであった」「この授業の内容は興味あるものだった」などが高い得点を示した。一方、「運動量は適切であった」は他の項目と比較して低い値を示した。



図Ⅲ-1-3. 授業に関する質問項目別の5段階評価 (シーズンスポーツ全体平均)

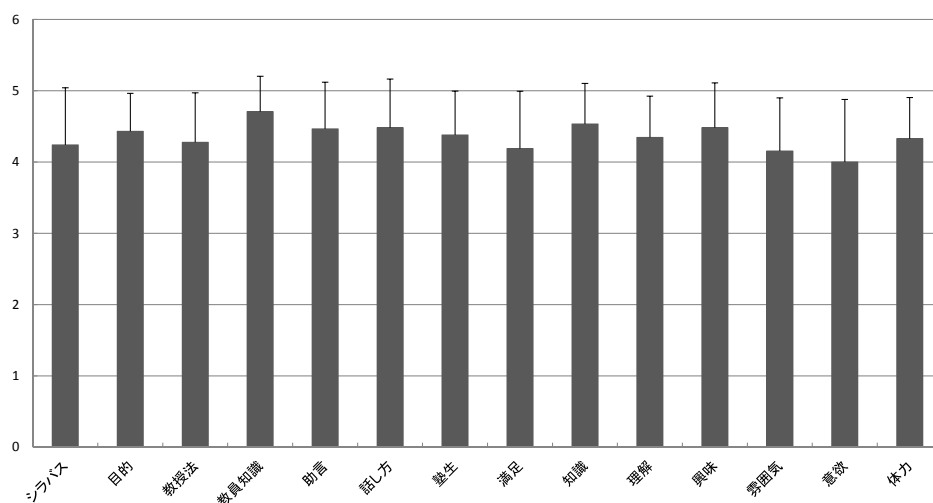
表Ⅲ-1-11. 種目別の5段階評価集計一覧 (シーズンスポーツ)

種目名	人数	シラバス	目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	理解	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量	
アウトドアレクリエーション	6	平均	4.7	4.8	4.8	4.8	4.7	4.8	4.7	4.8	4.5	4.7	4.8	4.5	4.7	4.5	4.5	4.7
		標準偏差	0.5	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
弓術	11	平均	4.2	4.5	4.9	4.8	4.7	4.5	4.3	4.8	4.5	4.4	4.8	4.5	4.8	4.6	4.3	4.5
		標準偏差	0.9	0.5	0.3	0.6	0.5	0.7	1.2	0.4	0.7	0.5	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5
Natuer & Trail	8	平均	4.8	4.6	5.0	5.0	4.6	4.8	4.8	4.9	4.8	4.1	5.0	4.9	4.6	4.9	4.5	4.1
		標準偏差	0.5	0.7	0.0	0.0	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.6	0.0	0.4	0.5	0.4	0.5	0.8
馬術	35	平均	4.6	4.7	4.8	4.8	4.7	4.8	4.8	4.8	4.7	4.9	4.7	4.7	4.6	4.5	4.3	
		標準偏差	0.9	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.4	0.6	0.6	0.7	0.7	0.9
ビーチバレー	23	平均	4.2	4.7	4.7	4.6	4.6	4.7	4.7	4.7	4.4	4.6	4.7	4.6	4.6	4.4	4.2	
		標準偏差	1.3	0.6	0.5	0.7	0.5	0.6	0.5	0.4	0.8	0.5	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7	
スケート	1	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	
		標準偏差	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
スキー	10	平均	4.5	4.5	4.7	4.8	4.6	4.4	4.4	4.6	4.4	4.5	4.5	4.1	4.4	4.5	4.0	3.9
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.8	0.7	0.7	0.5	0.7	0.7	0.7	0.7	1.1	1.0
マリンスポーツアクティビティ	17	平均	4.1	4.6	4.7	4.9	5.0	4.8	4.9	4.8	4.6	4.6	4.8	4.6	4.8	4.6	4.7	3.9
		標準偏差	1.0	0.6	0.5	0.2	0.0	0.4	0.3	0.4	0.6	0.6	0.4	0.5	0.4	0.6	0.5	0.9
ヨット	9	平均	4.4	4.4	4.6	4.9	4.4	4.8	4.9	4.6	4.7	4.4	4.8	4.6	4.6	4.3	4.1	4.0
		標準偏差	0.7	0.5	0.5	0.3	0.7	0.4	0.3	0.5	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	0.9	0.8	1.0
シーズン全体	120	平均	4.4	4.6	4.7	4.8	4.7	4.7	4.7	4.8	4.6	4.6	4.8	4.6	4.7	4.6	4.4	4.2
		標準偏差	0.9	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.6	0.5	0.6	0.6	0.6	0.7	0.8

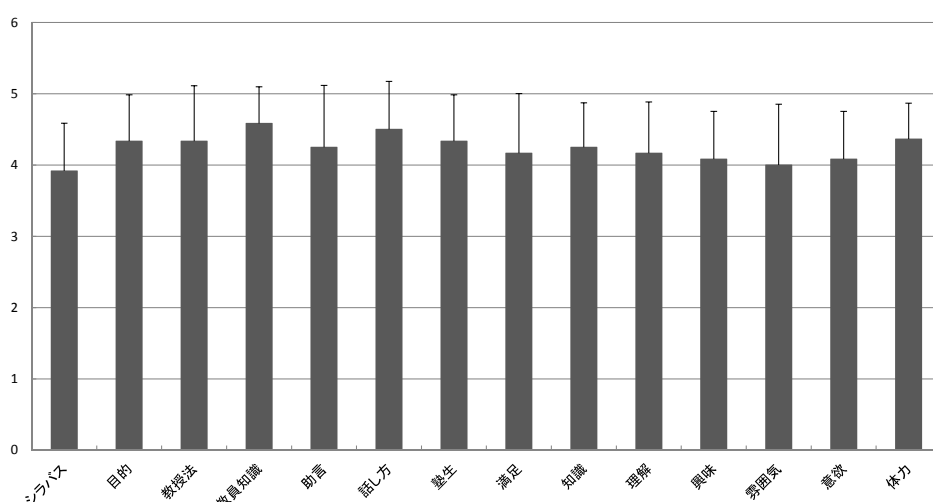
3) 講義・演習科目の授業評価

講義・演習科目の授業評価についての結果を図Ⅲ-1-4（春学期）、図Ⅲ-1-5（秋学期）に示した。ほとんどの項目とも平均値で4点をこえる肯定的評価が得られている。特に昨年度同様、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」は高い値を示した。

（春： 4.7 ± 0.5 ，秋： 4.6 ± 0.5 ）また、「自分はこの授業に意欲的に取り組んだ」の項目は低値を示す結果であった。これらのことは、やや教員側の一方的な授業になりがちであるのかもしれない。学生が授業に意欲的に取り組めるような授業づくりを目指す必要があると考えられる。



図Ⅲ-1-4. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期講義・演習全体平均）



図Ⅲ-1-5. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期講義全体平均）

3. 通信教育対象科目

1) 体育理論

レポートおよび試験問題の出題・採点を、石手靖君、加藤幸司君、野口和行君で担当した。

2) 体育実技スクーリング

夏期・立科合宿・秋期において体育実技を開講した。

夏期は平成26年8月6日から8月11日の6日間、9種目を日吉キャンパスにて実施した。本年度より、「スポーツクラス」（1単位）と「スポーツセミナー」（2単位）に分かれて実施することになった。スポーツクラスでは全体として昨年度よりも大幅に履修者が減少したが、スポーツセミナーでは昨年度ほぼ同程度の履修者が集まった。

立科合宿は平成26年9月12日～15日の間、慶應義塾立科山荘（長野県北佐久郡立科町）において、ヨガ&ピラティス、レクリエーショナル・スポーツ、バレーボール（計3種目）を実施した。

秋期は平成26年10月31日～11月3日まで、日吉キャンパスにてウォーキングエクササイズを行った。

これらの担当者および履修者数を表Ⅲ-1-12に示す。

表Ⅲ-1-12. 平成26年度通信教育部体育実技スクーリング開講種目および担当者一覧

種 目 名		担当者	定 員	履修者数	充足率	
夏 期	ス ポー ツ ク ラ ス	エアロビクス	佐々木玲子	20	7	35%
		ゴルフ	勝又 正浩	20	17	85%
		卓球	木林 弥生	30	5	17%
		バスケットボール	加藤 大仁	25	17	68%
		テニス	村松 憲	20	13	65%
		フットサル	須田 芳正	25	13	52%
		太極拳	孔 徳勝	20	3	15%
	水泳	鳥海 崇	40	11	28%	
スポーツセミナー	フィットネストレーニング	山内 賢	25	24	96%	
立 科	ヨガ&ピラティス		杉本 亮子	25	18	72%
	バレーボール		石手 靖	25	4	16%
	レクリエーショナルスポーツ		村山 光義	25	6	24%
秋期	ウォーキングエクササイズ		近藤 明彦	30	27	90%
合 計				330	165	50%

4. 他学部における体育関連授業の展開

日吉、三田及び芝共立において開講される体育研究所設置の体育科目および通信教育部のテキスト科目・スクーリング科目に加え、

各学部の設置科目の開講についても協力している。平成25年度の他学部設置科目及び担当者を表Ⅲ-1-13に示す。

表Ⅲ-1-13. 塾内における授業担当および協力

授業科目名	担当者	開講学部など	曜日時限など
薬学的保健体験学習	板垣 悦子	薬学部	秋学期火曜 1, 3 時限
薬学生のための体験学習プログラム	板垣 悦子	薬学部	春秋学期金曜日放課後
体育Ⅰ	野口 和行	総合政策学部 環境情報学部	春学期月曜 2・3 時限
体育Ⅱ・Ⅲ（野外スポーツ）	野口 和行	総合政策学部 環境情報学部	春学期月曜 2・3 時限
体育Ⅰ	村山 光義	総合政策学部 環境情報学部	春学期金曜 3・4 時限
体育Ⅱ・Ⅲ （レクリエーションスポーツ、フライングディスク）	村山 光義	総合政策学部 環境情報学部	秋学期金曜 2・3 時限
体育Ⅱ・Ⅲ（水泳）	鳥海 崇	総合政策学部 環境情報学部	春秋学期 火曜木曜 1・3 時限
人体の科学	佐々木玲子 村山 光義	理工学部	秋学期水曜 5 時限

Ⅲ－２ スポーツイベントの開催

1. 塾長杯・塾内競技大会

1) 塾長杯フットサル大会

1. 開催日：平成26年6月14日（土）
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：9:00～17:00
4. 参加チーム数：32チーム
5. 参加者数：約383名
（登録選手数276名（不参加1チーム8名）、教職員約15名、観客約100名）
6. 試合数：52試合（1チーム不参加のため）（最高6試合、最低2試合）
7. 協 力：体育会サッカー部審判
放送研究会（K-Sound）
8. 参加チーム抽選会
平成26年5月26日（月）16:30～17:30
スポーツ棟（体育研究所）2F会議室
9. 応募チーム数：41チーム
10. 表彰チーム
優勝：ちび marco
2位：鉄骨番長
3位：FC チョモランマ
けいおうキカーズ



11. コメント

本大会では、代表者を抽選会当日に集め、参加チームを決定する抽選会を経て開催される。本年度は、抽選会により選ばれた31チームと教職員チームを合わせた計32チームにおいて大会が行われた。

日吉記念館に3コート作り、予選リー

グは、12分間×1本、決勝トーナメントは15分間の一発勝負で優勝の栄光を賭けた激しい試合がいくつも繰り広げられた。特に決勝では、15分間で決着がつかず、5分間の延長戦まで行うなど、最後まで白熱した試合が展開された。

2) 塾長杯バレーボール大会

1. 開催日：平成26年10月25日（土）
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：8:00～17:00
4. 参加チーム数：42チーム（チャンピオンリーグ12、エンジョイリーグ30）
5. 参加者数：約389名
（登録選手数338名、教職員約15名、観客約50名）
6. 試合数：54試合（最高5試合、最低2試合）
7. 協 力：大会実行学生スタッフ
放送研究会（K-Sound）
8. 表彰チーム
チャンピオンリーグ
優勝：鳥野高校 OB 会
2位：lanzar
エンジョイリーグ
優勝：手話同好会 Sign
2位：KP34



9. コメント

本大会は、チャンピオンリーグ12チーム、エンジョイリーグ30チームと、近年稀に見る多数のチームが参加した。チャ

ンピオンリーグは3チーム4ブロックに分かれ、各ブロック1位が決勝トーナメントを戦った。エンジョイリーグは3チーム10ブロックに分かれ、こちらも各ブロック1位が決勝トーナメントを戦った。

チャンピオンリーグ、エンジョイリーグともに、白熱した試合が展開され、会場は大いに盛り上がった。

3) 塾長杯バスケットボール大会

1. 開催日：平成26年12月13日
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：9:00～17:00
4. 参加チーム数：24チーム(アルティメットリーグ12、エンジョイリーグ12)
5. 参加者数：約300名
(登録選手数約240名、教職員約10名、観客約50名)
6. 試合数：66試合(最高7試合、最低5試合)
7. 協 力：大会実行学生スタッフ
放送研究会(K-Sound)
審判団(日体大)
8. 参加チーム抽選会
平成26年12月1日(月)16:30～17:30
スポーツ棟(体育研究所)2F会議室
9. 応募チーム数
アルティメットリーグ：14チーム
エンジョイリーグ：15チーム
10. 表彰チーム
アルティメットリーグ
優勝：Sバス
2位：リコタイOB
エンジョイリーグ
優勝：レギュラー満タンでエイ
2位：KBB
11. コメント
本大会は、抽選会によって、アルティメットリーグ12チーム、エンジョイリーグ12チームに分かれて大会が行われた。

両リーグともに、チームのカラーを出し切って、迫力ある試合が展開された。

運営には、大会学生スタッフが準備から片付け、受付やゲーム進行を行い、外部から資格を持つ審判団を受け入れて行った。さらに塾内の放送研究会による試合実況などにより、大会はより一層盛り上がった。本大会は、参加選手をはじめ、大会実行学生スタッフ、審判団や教職員等、大会に関わるすべての人が一体となった大会であった。

4) 新春塾内卓球大会

1. 開催日：平成27年1月17日(土)
2. 会 場：スポーツ棟(体育研究所)
地下1階卓球場
3. 開催時間：10:00～15:00
4. 参加者数：45名
(塾生、教職員及び卒業生45名、学生スタッフ5名)
(シングルス21名、ダブルス14ペア)
5. ゲーム形式
11点先取3セットマッチ
6. 表彰チーム
ダブルス(中・上級の部)
優勝：守友康一(環境3年)
K(総合2年)
準優勝：三宅崇介(文4年)
本橋涼介(文4年)
ダブルス(温泉の部)
優勝：佐々木玲子(体育研究所)
板垣悦子(体育研究所)
準優勝：松本里穂(理工3年)
須賀健太(商2年)
シングルス(上級の部)
優勝：團 皆人(理工1年)
準優勝：守友康一(環境3年)
シングルス(中級の部)
優勝：宮南 渉(文2年)
準優勝：嶋本顕人(医2年)

シングルス（温泉の部）

優勝：松本里穂（理工3年）

準優勝：大月駿介（文4年）

7. コメント

本大会において、木林弥生君（体育研究所非常勤講師卓球担当）には、当委員会にご協力いただき、大会の事前準備から当日運営に至るまで、ご本人の卓球に関するご経験を活かし、大会の円滑な運営にご尽力いただいた。大会には卒業生の参加もあり、世代を超えた繋がりのできた大会となった。



2. 公開講座

1) ヨガ&ピラティス

1. 日程：平成26年5月12日(月)、14(水)、19日(月)、21日(水)、26日(月)、28日(水)
2. 会場：協生館エクササイズスタジオ
3. 開催時間：18:30～19:30
4. 講師：板垣悦子(体育研究所准教授)
杉本亮子
(体育研究所非常勤講師)
5. 参加者数：21名
(男性2名、女性20名)
6. 受講料：4,000円（塾内2,000円）
7. コメント

毎年ご好評いただいている本講座は、本年度は曜日によって内容をヨガとピラティスに分け、2名の講師が担当する形式とした。参加者には、2種類の動きを分けて学ぶことでそれぞれの内容の類似

点と相違点を感じ、自身の身体への気づきを深めてもらった。次年度は、より多くの方が気軽に参加しやすい設定で企画し、身近なスポーツ体験・活動を提供していく。



2) バドミントン

1. 日程：平成26年11月30日、12月7、14、21日の日曜日
2. 会場：日吉記念館
3. 開催時間：9:00～12:00
4. 講師：加藤幸司(体育研究所准教授)
5. 参加者数：5名（女性のみ）
6. 受講料：5,000円
7. コメント

バドミントン講座は、本年度初めて開催する講座である。広報の不足から参加者が5名と少ない人数での開講となってしまったが、参加者には基礎から試合までと、日曜の朝のスポーツ活動を楽しんでいただけた。参加者からは継続的な開催の希望も出ており、次年度は広報に力を入れ、多くの方にご参加いただけるように計画していく。



3. 教養研究センター日吉行事企画委員会共催企画

1) 日吉キャンパス体力測定

～君の秘めた能力を探せ～

1. 日 程：平成26年4月12日（土）
2. 会 場：協生館地下体育施設
3. 開催時間：10:45～14:30
4. 参加者数：17名
5. コメント

本イベントでは、日吉キャンパス内の体育施設を紹介するとともに塾生に現在の体力を示すことで、適したスポーツ種目の紹介と今後の大学生生活に役立つ運動・スポーツ情報を提供した。他機関(学部等)の企画と重なり、また1日の開催であったことから参加者は少なかったが、参加者は楽しく自身の現状の体力を把握していた。

2) 2014 FIFA WORLD CUP ブラジル

日本代表を応援しよう！！

1. 日 程：平成26年6月15日（土）
2. 会 場：協生館藤原記念ホール
3. 開催時間：9:00～12:00
4. 講 師：福士徳文（体育研究所助教）
岩崎 陸
(体育研究所非常勤所員)
5. 参加者数：236名
6. コメント

本企画では、世界のサッカーや慶應義塾におけるサッカーの歴史を学び、スポーツを通じて在校生・新生が一体となる機会を提供した。試合の結果は残念であったが、会場内で声をそろえた応援が起きるなど、スポーツが持つ魅力を十分に体感することができた会となった。

4. 所内施設の開放

1) プール一般開放

1. 期 間：
【春学期】平成26年5月8日（木）
～平成27年7月17日（木）
※毎週火・木曜日
【秋学期】平成26年10月2日（木）
～平成27年1月8日（木）
※毎週木曜日

2. 時 間：12:15～13:00
3. 場 所：協生館プール
4. 対象者：学部生、大学院生（留学生含）
5. 受付・監視：
加藤葉月君（理工2年）
岸野智康君（商学2年）
梅本雅之君（経済3年）
関龍太郎君（経済1年）
6. 利用者数：316名
【春学期】延べ147名
【秋学期】延べ169名

7. コメント：
開放情報も周知されつつあり、毎週泳ぎにくる学生もおり昼休みは学生で賑わっていた。



2) 協生館トレーニングルーム一般開放

1. 期 間：
【春学期】平成26年5月8日（木）～7月11日（金）
【秋学期】平成26年10月6日（月）
～平成27年1月16日（金）

2. 曜日時間：

【春学期】

木・金 15:00～18:00

【秋学期】

月 16:30～18:00

火・木 15:00～18:00

金 15:00～16:30

3. 担当者

【春学期】

木：金澤正充（経済4年）

金：永田直也・福士徳文（助教）

【秋学期】

月：深田真理（経済2年）

火：白岩萌子（商学2年）

木：

金：永田直也・福士徳文（助教）

4. 利用者数：986名

（春学期585名、秋学期401名）

5. コメント：

本年度は月曜、火曜、木曜、金曜において協生館トレーニングルームの開放を行った。学生間の認知度も上がり、女子学生の利用もみられるようになった。利用者数は年々増加しており、最近では時間帯によっては混雑することもあるので、トレーニング機器の占有をせず、譲り合って効率的な利用ができるようにしている。



3) 多目的コートの貸出

1. 曜日時間：平日 授業終了後
土日 終日可

2. 利用状況：208団体
（春学期 112団体、秋学期 96団体）

3. 日数：日稼働
（春学期84日開放、秋学期103日開放）

4. コメント：

トレーニングルームの開放同様に、塾生間の認知度が上がり、多数の団体からの借用申請でほぼ毎日埋まっている。最近では、「多目的コート貸出」という題目の本旨のように、多種目での利用者団体が増加し、団体間の交流もさらに深まっている。今後は利用者へのさらなる周知をするとともに、塾長杯バレーボール大会の予選等、塾生の交流の場として運用していきたい。

第3校舎下
多目的コート
貸出し中

バレーボール・フットサルなど

● 利用可能時間 ●
平日 授業終了後～
土日祝 終日可

※ただし、特別日除く

【利用方法】

- ①体育研究の発行にて予約する。（電話予約不可）
代読委員会が学生証を持参の上、申込。
- ②予約として、一団体の予約より包まず。
・複数日の予約はできません。
- ③予約の日付は、体育研究の発行にてバレーボールコートは予約借り、登録返却。
・本日の利用者が複数団体の場合、各団体間同士で鍵の授渡方法を相談。
・事前に、使用する団体の人数を記入し、（体育研究の発行）
・返却が滞りた場合、貸出停止となる可能性があります。

※詳細は体育研究所発行にて直接お問い合わせください。

慶應義塾大学 体育研究所

Ⅲ－3 他機関との連携

1. 公開講座

1) 慶應義塾大学・読売新聞社 横浜市民講座「スポーツの見方・楽しみ方」(全5回)

第1回

タイトル：「スポーツ文化からオリンピックを理解する」

日 程：平成26年6月7日(土)

会 場：日吉キャンパス 第4校舎独立館 DB202教室

開催時間：14:00～15:30

対 象 者：誰でも参加可(定員：300名)

講 師：村山 光義

参加者数：約100名

受 講 料：無料

第5回

タイトル：「スポーツを体験してみよう」

日 程：平成26年7月5日(土)

会 場：スポーツ棟体育研究所2階会議室

開催時間：14:00～15:30

対 象 者：誰でも参加可(定員：100名)

講 師：野口 和行, 板垣 悦子

参加者数：約40名

受 講 料：無料

2. 一貫校連携

1) 幼稚舎館山遠泳合宿(水泳指導教員)

日 程：平成25年7月21～25日

会 場：千葉県館山市見物海岸

対 象 者：6年生

講 師：鳥海 崇

参加者数：25名

3. 体育会支援

綿田 博人 体育会副理事、高等学校硬式野球部特別招聘コーチ

石手 靖 体育会参与

吉田 泰将 剣道部師範、医学部剣道部師範代行

加藤 幸司 バトミントン部ヘッドコーチ

須田 芳正 ソッカー部監督

鳥海 崇 体育会副理事、水泳部水球部門コーチ

坂井 利彰 庭球部監督

福土 徳文 ソッカー部コーチ

IV. 業務活動記録

IV. 業務活動記録

平成26年度総務分野関係報告

1 人事

- (1) 就任（新任）
福士徳文君（助教（有期））（4月1日付）
- (2) 就任（継続）
永田直也君（助教（有期））（4月1日付）

2 塾内役職

- (1) 教職員評議員
石手 靖君（所長）（11月1日～）
- (2) 大学寄宿舍舎監
近藤明彦君
- (3) 大学寄宿舍委員会委員
近藤明彦君
- (4) 大学教養研究センター運営委員
石手 靖君（所長）
- (5) 大学教養研究センター所員
近藤明彦君、石手 靖君、村山光義君、
吉田泰将君、加藤大仁君、野口和行君、
村松 憲君、佐々木玲子君、山内 賢君
- (6) 大学学生総合センター副部長（日吉支部）
村山光義君
- (7) 体育会副理事
綿田博人君、鳥海 崇君
- (8) 体育会参与
石手 靖君（所長）
- (9) 極東証券寄附講座「生命の教養学」企画委員
鳥海 崇君
- (10) 日吉行事企画委員会（HAPP）委員
石手 靖君
- (11) 立科山荘運営委員会委員
野口和行君
- (12) 日吉キャンパス公開講座運営委員会委員
佐々木玲子君
- (13) 日吉記念館運営連絡協議会委員
石手 靖君、加藤幸司君、鳥海 崇君
- (14) 総合研究推進機構研究倫理委員会研究倫理審査委員会委員
佐々木玲子君
- (15) 大学保健管理センター運営委員
石手 靖君（所長）
- (16) 大学スポーツ医学研究センター運営委員
石手 靖君（所長）（10月1日～）

- (17) 日吉キャンパス衛生委員
山内 賢君
- (18) 日吉キャンパス運営委員
石手 靖君（所長）（10月1日～）
- (19) Hiyoshi Research Portfolio（HRP）運営委員
石手 靖君（所長）
- (20) Hiyoshi Research Portfolio（HRP）実行委員
村山光義君
- (21) 通信教育部学務委員
村松 憲君

3 研究所内役職の主なもの

- (1) 所 長
石手 靖君
- (2) 人事委員会委員
石手 靖君、植田史生君、近藤明彦君、
佐々木玲子君、綿田博人君、村山光義君
- (3) 学習指導主任
野口和行君
- (4) 学習指導副主任
須田芳正君
- (5) 総務委員会委員長
吉田泰将君
- (6) 教育委員会委員長
野口和行君
- (7) 研究委員会委員長
村山光義君
- (8) スポーツ振興委員会委員長
加藤幸司君
- (9) 将来構想委員会委員長
村松 憲君
- (10) 活動報告書編集委員会委員長
吉田泰将君

4 その他

未来先導基金公募プログラム「剣道の国際交流
およびハーバード大教育制度の体験プログラム」
を実施した。

活動代表者 植田史生君

日 程 2015年2月22日～28日

参加学生数 15名

（主事 黒田修生）

平成26年度活動報告書

平成27年7月1日発行

[非売品]

編集：活動報告書編集委員会

吉田 泰将（委員長）

板垣 悦子 村松 憲 鳥海 崇

永田 直也 福士 徳文

発行：慶應義塾大学体育研究所

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

制作：(有)梅沢印刷所

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45